

18世紀フランスにおけるミソジニーとナショナリズム

玉田 敦子

# 18 世紀フランスにおけるミソジニーとナショナリズム

玉田 敦子



# 目 次

|   |    |
|---|----|
| 18 世紀フランスにおけるミソジニーとナショナリズム.....               | 5  |
| I. 「習俗」の墮落と女性 .....                           | 6  |
| 18 世紀フランスにおける文明批判とミソジニー .....                 | 6  |
| ルソーによる近代的女性像の反近代性 .....                       | 11 |
| II. 「男性的」な趣味の回帰と文化的ナショナリズム .....              | 17 |
| 修辞学における趣味判断の重要性 —— 模倣すべき「古典」の生成 .....         | 17 |
| 18 世紀フランス修辞学におけるロンギノス『崇高論』と趣味判断 .....         | 21 |
| ボワローによる『崇高論』仏訳とその受容 .....                     | 23 |
| 文体における都市的な洗練 (urbanité du style) の流行と衰退 ..... | 25 |
| III. バーク『崇高論』と文化的ナショナリズム .....                | 27 |
| バークによるフランスの位置づけ —— 『崇高と美の起原』と『フランス革命の省察』 .... | 27 |
| 『オシアン』の崇高をめぐって .....                          | 30 |
| 結論.....                                       | 33 |
| 参考文献 .....                                    | 34 |



## 18 世紀フランスにおけるミソジニーとナショナリズム

玉田 敦子

革命以前のフランスは、サロンや宮廷を中心とした華やかで女性的な文化が発展したことで知られている。また現在でも、一般に、フランスに関するイメージでは、都会的に洗練されたファッションなど「女性的な文化」の占める割合が大きい。ところがフランス本国においては、こうした「女性的な文化」は歴史的には必ずしも評価されてきたわけではない。本稿では、まず、18 世紀のフランスでは「女性的な文化」が批判の対象となり、「男性的な文化」が興隆していった過程について考察したい。その上で、18 世紀後半、特に七年戦争の敗北後におけるナショナリズムの台頭とともに、「英雄的」という価値が称賛されるようになった点についても明らかにしたい。

従来、18 世紀フランスに関するジェンダー研究においては、オランプ・ド・グージュなど、アンシャン・レژیームからフランス革命にかけて、女性の権利を求めた女性の論者に焦点が当てられることが多かった。本論文においては 18 世紀フランスにおいて、男性が「女性」という存在をどのように扱っていたのかという点に絞って考察をおこないたい。同時代の英語圏と比較した際、たとえばヒュームやスミスによる文明論と比べた場合、フランスにおける女性観には明らかなミソジニー（女性嫌悪）が見られることが多い。ところがこの点については、これまで広い考察がまだない。アンシャン・レژیームにおける女性と文化の問題についてはリンダ・ティメルマンによる研究があるが、ティメルマンの研究は 1715 年までを対象としており、また革命期の女性を対象とした研究としてはリン・ハントによる考察が知られているが、いわゆる 18 世紀のフランスにおけるミソジニーを扱う研究は近年見られない<sup>1</sup>。

本論文では、まず、この 18 世紀フランスのミソジニーについて、特に、道徳的な価値判断の基準を示す「習俗 (mœurs)」という局面と、美的な価値判断の基準である「趣味 (taste / goût)」という局面から考察をおこなう。なぜならば、18 世紀フランスにおいて女性たちは、この習俗と趣味の腐敗、もしくは墮落をもたらす主犯と考えられており、こうした批判が後を絶たなかったからである。本論に入る前に、まず習俗と趣味という二つの概念について簡潔に定義をしておきたい。習俗は 18 世紀フランスにおいて広く議論の対象となった概念であるが、形容詞「道徳の (moral)」のもとになる道徳に関する規範概念、すなわち法の外で法ととも

---

1 Linda Timmermans, *L'accès des femmes à la culture*, Honoré Champion, 1993 ; Lynn Hunt, *Politics, culture, and class in the French Revolution*, University of California Press, 1984 [松浦義弘訳『フランス革命の政治文化』平凡社、1989 年] ; *id.*, *The family romance of the French Revolution*, University of California Press, 1992 [西川長夫・平野千果子・天野知恵子訳『フランス革命と家族ロマンス』平凡社、1999 年] ; *id.*, *Inventing human rights : a history*, W. W. Norton, 2007. [松浦義弘訳『人権を創造する』岩波書店、2011 年]

に人間の行動を規定するものである。趣味については、日本語の趣味という表現よりも英語の taste という語の方が馴染み深いのが、習俗が道徳的な価値判断の基準であるのに対して、趣味は美的な価値判断の基準である。

本論の第一部では、まず 18 世紀フランスにおける社会制度などの歴史的な文脈を確認しながら、モンテスキューやルソーによってなされた女性や女性的な文化（習俗）に対する批判を思想的な観点から分析する。また第二部では、こうした批判が趣味判断と呼ばれる文学作品に対する美的判断の価値基準の変容とどのように連動していたかを考察したい。ここでは、またモンテスキューが徳と称した英雄性への志向や男性的な文化の回帰について検討していく。最後に第三部では、文学作品の男性的な価値として重んじられていた崇高が英語圏において美学的な概念としてどのように発展したのか、さらにエドモンド・バークが崇高の対概念とした美という価値を軽んじたのはなぜかを論じていきたい。

## I. 「習俗」の墮落と女性

### 18 世紀フランスにおける文明批判とミソジニー

18 世紀における習俗に関する研究としては、まずポーコックの『徳・商業・歴史』（1985 年）をあげることができる。ポーコックは、『徳・商業・歴史』の第二章「徳、権利、作法」において、近代社会の成立における習俗の変容について分析し、18 世紀を古典古代に淵源をもつ「市民的徳」から、商業社会を基盤とする近代的倫理への転換期と位置づけている。ポーコックは、「古典的徳」と「商業の理念」は両立しないことを強調しつつ、また、商業の役割を「情念を洗練させ、作法を磨かせる」こととしながら、「徳が作法の実践・洗練として定義できるかぎり、事物への権利が徳の実践に至る道となった。商業的ヒューマンイズムの構築は成功しなかったわけではない」<sup>2</sup>としている。このポーコックの議論は 18 世紀の英語圏について考察する場合にはおそらく妥当である。たとえばスコットランドの思想家ヒュームは 1742 年に刊行した『道徳政治学論』の第二巻、「技芸における洗練において」という章において以下のように論じている。

技芸には精神や肉体を弱めるような影響はない。それどころか、技芸と切り離すことのできない産業活動が精神と肉体に新しい力を増し加える。そして、たとえ、勇気を刺激するといわれる憤怒が、上品さや洗練によってその激しさを幾分失うとしても、これよりもっと強靱かつ不動で、もっと統御しやすい原理である名誉心が、知識と優れた教育とが生む資質の

---

2 John Greville Agard Pocock, *Virtue, commerce, and history: essays on political thought and history, chiefly in the eighteenth century* [1985], Cambridge University Press, 1995, p. 50. [J. G. A. ポーコック『徳・商業・歴史』田中秀夫訳、みすず書房、1993 年、94 頁]

向上によって、新たな活力を獲得する<sup>3</sup>。

しかし18世紀フランスにおける習俗について言えば、ポーコックによる習俗の文明化の理論は必ずしも当てはまらないのではないだろうか。本章においては、まずこの点について考察をおこないたい。

ルネッサンス期以降、フランスにおいて宮廷やサロンを舞台とした女性的な文化が発展した背景には商業の発展がある。ここで問題となる商業とは、「ネゴシアン (négociant)」と呼ばれる大商人が携わった三角貿易のことである。三角貿易は、新大陸の発見以来、数世紀の間、アフリカからアメリカに強制連行した人々をプランテーションで働かせ、タバコ、綿花、コーヒー、砂糖など、利益率の高い商品を作らせることによって、ヨーロッパに莫大な利益をもたらしていた。

革命前のフランスは、第一身分 (僧侶)、第二身分 (貴族)、第三身分 (平民) という三つの身分で構成される身分制社会であった。その中で、第一身分の僧侶と、第二身分の貴族は領地からの収入を得ており、貴族が商業に携わることについては議論が絶えなかった<sup>4</sup>。当時、裕福な平民は官職を購入することによって貴族の身分を手に入れることができたため、国際的な交易をとおして富を蓄えた商人たちの中には貴族になり、納税を免れるようになる者も現れた。とはいえ一般的には貴族は軍人であることが第一の職務と考えられており、商業との兼業は好ましくないとされていた。このように貴族と商人の間での分業が機能していたのは、当時のフランス社会が、商業は卑しいものという価値観を暗黙の了解事項としていたからである。

18世紀においてはイギリスでも現実には貴族が商業に従事することは恥ずかしいこととされていた。しかしながらマンドヴィルの『蜂の寓話』を嚆矢として、アダム・ファーガソン、ヒュームやスミスが発展させた英語圏の商業擁護論は、本国だけでなくフランスにおいても広く読まれ、大きな影響力をもつことになった。このため、フランスでも英語圏の思想の影響を強く受けた啓蒙思想家、特にヴォルテールやモンテスキューは、ポーコックが『徳・商業・歴史』において論じたとおり商業に対して好意的な態度を示し、イギリスにおける商業の発展とその利点を紹介することに努めた。中でも、ヴォルテールが1734年に刊行し、『哲学書簡』の第10書簡において、「イギリスでは商業に従事していることを頬を赤らめずに話す」と言って驚かせてみせたのは良く知られている<sup>5</sup>。ヴォルテールは、1726年から1728年までイギリスで亡命生活を送っていたが、もともと『イギリス便り』という原題で刊行されていた『哲学書簡』

3 *Essays moral political and literary* [1742], edited by Eugene F. Miller, Liberty Fund, 1985, 1987, p. 274. [ヒューム『道徳・政治・文学論集』田中敏弘訳、名古屋大学出版会、2011年、225頁]

4 森村敏己「商人貴族論の射程——貴族は有用な市民か?」、『一橋社会科学』1巻、2009年11月、1-20頁。

5 Voltaire, « Lettres Philosophiques », in *Mélanges*, éd. Jacques Van den Heuvel, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1961, p. 28. [中川信・高橋安光訳『哲学書簡・哲学辞典』中央公論新社、〈中公クラシックス W44〉、2005年]



におけるイギリスの制度、習俗、思想に関する報告は、フランスの旧体制に対する鋭い問題提起をもたらすものであり、フランス啓蒙が生起する発端となるものであった<sup>6</sup>。ヴォルテールは、1756年に、『哲学書簡』の冒頭の部分を以下のように書き換え、イギリスを軍事国から商業国に変容を遂げることによって栄えた唯一の国として称賛している。

カルタゴの滅亡以後、商業と軍事力の双方において隆盛を誇った民はヴェニス以外に存在しなかった。(中略)カルタゴもヴェニスもオランダも、戦争に強かった国が商業でも優れるようになったのではない。イギリスだけがその例外であった。イギリスも商業を始める前はずっと戦争ばかりしていた。(中略)イギリスが経済的に豊かな国となり、軍事的にも強国となりえたのは、この(商業の)知識を得たためである。エドアルド3世がフランスの領土の二分の一を征服したとき、ロンドンに貧しく鄙びた都市であった。ロンドンがパリよりも大きな都市になり、多くの市民を抱えるようになったのは、ひとえにイギリス人がネゴシアンになったことによるものである<sup>7</sup>。

フランスにおける「商業擁護」の議論として、ヴォルテールの『哲学書簡』と並び、常に取り上げられるのは、モンテスキューが『法の精神』(1748年)において「商業は習俗を穏和にする」と述べる以下の箇所である。

商業は破壊的な偏見を癒す。習俗が穏やかなところではどこでも商業が存在しているというのがほとんど一般的な原則である。また商業が存在するところではどこでも、穏やかな習俗が存在するというのもそうである。だからわれわれの習俗が、かつてそうであったほど残忍でないとしても驚くにはあたらない。商業はあらゆる国民の習俗についての知識がいたるところに滲透するような働きをなしたのである。人はこれらの習俗を相互に比較したが、そこから大いに有益な成果が出てきた。商業に関する法律は、まさにこの法律が習俗を墮落させるのと同じ理由で、習俗を改善することができる。商業は純真な習俗を腐敗させる。これがプラトンの嘆きの種であった。商業はわれわれが毎日見ているように、野蛮な習俗を磨き、これを穏和にする<sup>8</sup>。

モンテスキューはまた、こうした大規模な商業がもたらす結果としての「奢侈 (luxe)」に関しても君主制国家において当然存在するものであるとし、必要であるとさえする<sup>9</sup>。ところが、

6 安藤隆穂『フランス自由主義の成立——公共圏の思想史』名古屋大学出版会、2007年、23-30頁。

7 Voltaire, « Notes et Variantes de Lettres Philosophiques », in *Mélanges*, éd. cit., p. 1379.

8 Montesquieu, *De l'esprit des lois* [1748], éd. par Roger Caillois, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, t. II, 1949, p. 585. [野田良之・稲本洋之助・上原行雄・田中治男・三辺博之・横田地弘訳『法の精神』第20編、岩波文庫、中巻、1989年、201頁]下線は引用者による。

9 *Ibid.*, p. 688. [同書第23編、中巻、355頁]

モンテスキューは君主制国家における商業の発展と奢侈については肯定的である反面、君主制国家において奢侈を牽引する役割を果たす「女性」について論じる際には、明らかに女性を批判する立場で議論を展開していく。たとえば、『法の精神』第7編第9章においては以下のように論じている。

君主政の国々では女性はあまり慎みがない。なぜなら、序列の上で際立っていることが女性を宮廷に招くのであり、女性が宮廷に行くのは、宮廷で大目に見られるほとんど唯一のものたるあの自由の精神を身につけるためだからである。各人は自分の出世のために女性の魅力と情念とを利用する。そして、その弱さゆえに彼女に許されるのは傲慢ではなくて虚栄なので、ここでは奢侈が常に女性とともに支配する<sup>10</sup>。

モンテスキューは『法の精神』において、共和制、君主制、専制という3つの政体の差異について論じる際、共和制に対する憧憬を隠さないままに、専制を批判し、その上で妥協策としての君主制を提示するという立場をとる。従来、モンテスキューの「商業は習俗を穏和にする」という記述は、モンテスキューが商業は人間の習俗に対して良い効果をもたらすとして商業を擁護していることの論拠とされてきた。しかしモンテスキューは、商業によって「純粋な習俗」は腐敗するが、その一方で「野蛮な習俗」は磨かれるとしている。この「純粋な習俗の腐敗」と「野蛮な習俗の洗練」に関して、セリーヌ・スペクトールは、モンテスキューがここで個人と国家という二つの水準における議論をしていると指摘している。つまり、国家間においては、商取引が盛んになれば、常に戦争に備え、軍備を増強する必要がなくなるため、商業は国家レベルにおいては習俗を穏和にする効果をもたらす。その反面、商業によって蓄積される富は、個人のレベルにおいては「純粋な習俗」を腐敗させ、人々を墮落へ導くのである。モンテスキューは、共和制の国家は「祖国への愛、真の榮譽への欲求、自己放棄、自己の最も大事な利益の犠牲」といった古代的な徳に導かれるとする反面、君主制の国家はこうした徳と無関係に存続するとしている<sup>11</sup>。ここでは君主制国家における商業の発展とその結果としての奢侈が容認されると同時に、個人のモラルもまた不必要なものとして捨象されているのである<sup>12</sup>。

モンテスキューは、さらに同じ『法の精神』の第23篇「住民の数との関係における法律について」の第9章「女性について」においては以下のように述べる。

女性は結婚によってしか喜びや自由へと導かれることができない。彼女たちはものを考えようとしない精神をもち、感じようともしない心をもち、見ようとしない目をもち、聞こうとしない耳をもっている。人前に姿を現すときは愚かな振る舞いしかせず、たえず下らないお

10 *Ibid.*, p. 341. [同書第7編、上巻、210頁]

11 *Ibid.*, pp. 255-256. [同書第3編、上巻、76-79頁]

12 Céline Spector, *Montesquieu : Liberté, droit et histoire*, Michalon, « Le bien commun », 2010, pp. 237-243.

こないをし、お説教を受けることから免れえないが、結婚する気持ちは十分にある<sup>13</sup>。

このような女性蔑視的な記述は、しかしアンシャン・レジームにおいてモンテスキューに固有に見られるものではない。リンダ・ティメルマンやドミニク・ゴディノーの研究が示唆するように、16世紀までのヨーロッパの女性は「男性に黙って仕える」ことを求められることが主流であった。女性が男性と対等の地位を築くという考え方は文芸復興、宗教改革を経てもなお少数派であり、ルネサンス期以降も女性の主体性が認められないのは極めて一般的なことであったからである<sup>14</sup>。18世紀フランスにおいては、ヴォルテールやディドロ、エルヴェシウスも女性蔑視的な記述を繰り返しており、反近代的な紋切り型が広く流通していた。しかし、このモンテスキューの女性観は、君主制国家における奢侈の肯定というモンテスキューの思想の根幹をなす重要な箇所を構成していたことから、その後も重要な典拠として利用されていく。

このことを如実に表しているのは、『百科全書』における項目「習俗 (mœurs)」(1765年)である。18世紀にディドロが主導して編纂した『百科全書』の項目は、同時代の思想潮流や科学的知見について、他の書物からの記述をもとに当時もっとも一般的な議論を提示する役割を果たしていた。それゆえこの『百科全書』における項目「習俗」が、フランスにおいては、女性、そして女性的な文化が「習俗を退廃させた」と記しているのは特筆に値する。この項目は、執筆者が明らかにされていない項目の一つであるが、筆者はモンテスキューの三政体理論に基づきながら、より凝縮した形で議論を展開している。

女性たちが見本を示す豊かな絶対君主政においては、名誉、野心、〔女性に対する〕心配り、快楽を好む気持ち、虚栄心、優柔さといったものが臣民の特徴となる。またこの種の政体は無為を生み出し、無為は習俗を退廃させるが、その代わりに洗練された礼儀作法を作り出す<sup>15</sup>。

このような18世紀フランスの女性文化批判は、フランス固有の現象であることもつけ加えておかねばならない。18世紀はオーストリアではマリア・テレジア、また、ロシアではエカテリーナ1世、エリザベータ、エカテリーナ2世という三人の女帝が国を統治するなど、女性の専制君主が活躍する時代である。それに対してフランスでは、サリカ法により女性が王位に就くことが禁じられており、このような例はまったく見られない。しかも1780年代以降、奢侈と退廃した習俗を象徴する王妃と見なされていたマリー・アントワネットに関するエロティ

13 Montesquieu, *op.cit.*, p. 688. [『法の精神』中巻、355頁]

14 Linda Timmermans, *op.cit.*; Dominique Godineau, *Les femmes dans la France moderne - XVI<sup>e</sup>-XVIII<sup>e</sup> siècle*, Armand Colin, 2015.

15 Anonyme, art. « Mœurs » de l'*Encyclopédie ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*, Samuel Faulche, Neufchâtel, t. X, [1765], Friedrich Frommann Verlag, Stuttgart-Bad Cannstatt, 1988, p. 611b. 訳文は、『習俗』国書刊行会、〈十八世紀叢書〉、361-362頁の翻訳を参考にした。

ックな誹謗文書が横行し、女性文化批判の火に油が注がれることになる。

また、18世紀フランスの特殊性は、同時代の英語圏において、女性的な文化が重用され、一定の存在感を保ち続けたことに着眼すると一層明らかになる。しかも英語圏ではフランスとは異なり、商業の発展を契機に広がった「女性的な文化」は一般に好意的に受けとめられていた。英語圏において、商業は習俗と趣味を洗練させると考えられており、商業に結びついた「女性的な文化」も肯定的に受け入れられていた。このことは、ヒュームによる文明論だけでなく、アダム・スミスが『修辞学・文学講義』において「上流女性の会話」を「言語の最善の基準」としていることからもうかがわれる。『修辞学・文学講義』は1762年から1763年にかけてスミスがグラスゴー大学でおこなった講義のノートであるが、この『講義』のなかでスミスは以下のように説いている。

フランスとイングランドでは、上流女性の会話が言語の最善の規準であるとよくいわれるが、それは、彼女たちの行動と話しかたのなかに、あるせん細さと快適さがあって、一般にわれわれは、快適なものは何でも、それにとまなうものに深い印象をあたえ、同時に快適さということの意味を伝達するのだと思うからだ、とされる<sup>16</sup>。

ここでスミスが「上流女性の会話」が「言語の最善の基準」と言うときに明白に参照しているのは、ヴォージュラが1647年に書いた『フランス語に関する覚書』である。17世紀においてはフランスでも宮廷が文化の中心をなし、宮廷での使用される言語がフランス語の模範と見なされていた。ヴォージュラが『フランス語に関する覚書』において「よき慣用とは次のように定義される。今の作家たちの書くフランス語におけるもっとも健全な部分に合致した、宮廷において話されるフランス語において、もっとも健全な部分である」<sup>17</sup>と書いたことから、宮廷において話されるフランス語が「よき慣用」とされていたのである。ところがフランスでは18世紀になると状況が変化し、このヴォージュラ的な伝統は批判の対象になる。

### ルソーによる近代的女性像の反近代性

18世紀フランスにおいて、商業の発展による習俗と趣味の洗練という理念に対して、もっとも鋭い批判をおこなったのはルソーである。上に述べたようにモンテスキューの女性批判はその後のフランスにおける世論形成において重要な役割を果たしていたが、それぞれの記述は断片的なものであり、何らかの体系的な理論を構築するものではなかった。それに対してルソーは、文明社会において主要な役割を果たす女性を非難していくことによって、文明批判の先をそのまま女性そのものに向けていった。

---

16 Adam Smith, *Lectures on Rhetoric and Belles Letters* [1762-63], edited by J.C. Bryce, Indianapolis, Liberty Fund, 1983, p. 5. [アダム・スミス『文学・修辞学講義』アダム・スミスの会監修、水田洋・松原慶子訳、名古屋大学出版会、2004年、7頁]

17 Claude Favre de Vaugelas, *Remarques sur la langue française* [1647], Éditions Ivreas, 1996, p. 10.

ルソーが広く名を知られるようになったきっかけは、1750年にディジョンのアカデミーが募集し、ルソーが受賞をした懸賞論文である。後に『学問芸術論』と題されて刊行される、この懸賞論文の主題は、「学問と芸術の再興は、習俗を純化することに寄与したか、それとも腐敗させることに寄与したか？」というものであった。この主題についてルソーは、「学問と芸術の再興」は「習俗」をまったく「純化」させることないばかりか、激しく「腐敗」させることになったと論じている。ルソーがここで「腐敗」とするのは、古代ギリシア・ローマで発展した純粋な習俗が、近代における「洗練」によって「男性性」を犠牲にして女性化したことである。

金銭によってすべてが得られるにしても、習俗と市民はそのかぎりではないということ一度は知って欲しいのである。(中略) 高名なるアルーエ〔ヴォルテール〕よ、言っていたきたい。あなたがわれわれの偽りの繊細さのために、男性的な力強い美をいかに犠牲にされたか、そして瑣末な事柄に満ちた優雅の精神が、あなたにいかに偉大なものを失わせたかを。このようにして、奢侈の必然的な結果である習俗の退廃が、あらためて趣味の腐敗をもたらす<sup>18</sup>。

先に見たように、女性が習俗を腐敗させるという考え方は、17世紀から18世紀のフランスにおいて特定の思想家に固有のものではなく、アンシャン・レジームのフランスにおいて共有され、様々な場において表出した女性観であった。モンテスキューをはじめとする啓蒙の思想家たちは、中世以降において一般的であった女性表象に関する紋切り型を無批判に踏襲していたわけである。一方、ルソーの女性観は、他の思想家たちの紋切り型を離れ、ルソーが指し示す近代的人間像の裏面ともいえる思想を構成しており、近代的市民社会に確固として組み込まれている。この点においてルソーが描く女性像は重要な役割を果たしていく。このため、ここではルソーが『エミール』において構築を試みた近代的な女性観を手がかりに、アンシャン・レジームのフランスにおいて形成された「近代的ミソジニー」の理論的根拠を検討したい。

『エミール』は、ルソーが家庭教師として少年エミールに理想的な教育を授けるという設定で書かれた教育論として知られている。この『エミール』の第5篇には、少年エミールの将来の伴侶となるソフィーが登場し、ルソーはここで女性に対する理想的な教育を理論化している。ルソーによれば「自然の男子を育て上げる努力をしたあとで、わたしたちの仕事が未完成に終わらせないために、こんどは自然の男子にふさわしい女性はどんなふう育てられなけれ

---

18 Jean-Jacques Rousseau, « Discours qui a remporté le prix à l'Académie de Dijon. En l'année 1750. Sur cette question proposé par la même Académie : Si le rétablissement des Sciences et des Arts a contribué à épurer les mœurs (Discours sur les sciences et les arts) » in *Œuvres Complètes*, éd. par François Boucharly et al., Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. III, 1964, pp. 20-21. [山路昭訳「学問芸術論」、白水クラシックス『文明』所収、白水社、2012年、33-34頁]

ばならないかを見ること<sup>19</sup>が必要だからである。『エミール』第5篇において、ルソーはまずプラトンが『国家』において、「人間が女としてもっている自然本来の素質は、あらゆる仕事を男性と共通に分担することができるものである」<sup>20</sup>としている箇所を批判する。プラトンが、家庭の内外を問わず、また軍事的な要請を含めて、あらゆる仕事は男女双方が揃って分担すべきとしていることについて、ルソーは以下のように男女が同じ仕事に取り組むことは社会的な混乱を生み出すとする。

プラトンは「国家篇」のなかで、女にも男と同じ訓練をさせている。それは当然のことだと思う。かれの国家では個々の家族を廃止してしまったので、婦人をどうしたらいいかわからなくなったプラトンは、女を男にしなければならなくなったのだ。このすばらしい天才はあらゆることを考え合わせ、いっさいのことを予想していた。(中略) わたしは、いたるところで差別なしに男女に同じ職務、同じ仕事をさせ、とてもがまんのならない弊害を生み出さずにはおかない、社会的混乱について語るのだ<sup>21</sup>。

プラトンの男女平等理論に対しては、アリストテレスが『政治学』第一巻「国家と家政」において以下のように論じた内容が反論を形成していることが知られている。「支配と被支配はたんに欠くことができないばかりか、また有益なことでもある。(中略) 女性に対する男性の関係であるが、自然によって男性は優り、女性は劣るからして、前者は支配するもの、後者は支配される者である。そしてこの同じ関係がすべての人間に当てはまらなければならない」<sup>22</sup>。しかしここでルソーはアリストテレスの議論を一切援用することなく論証を進めていく。ルソーはまず、男性と女性は、それぞれ精神も肉体も異なっているので、同じ教育を受けるべきではなく、同じ仕事をするべきではないと述べる。

男と女とは、性格においても、体質においても、同じようにつくられてはいないし、同じようにつくられるべきでもないということが証明されれば、男と女は同じ教育をうけるべきではないということになる。男と女とは、自然の指示にしたがって、協力して行動しなければならないが、同じことをなすべきではない。仕事の目標は共通だが、仕事そのものはちがっている。したがってまた、仕事を方向づける好みもちがっている<sup>23</sup>。

このようにルソーが性別に従い、完全な分業をすることを求めるのは、女性の役割を「男性の

19 Jean-Jacques Rousseau, « Emile » in *Œuvres Complètes*, éd. par Bernard Gagnebin et Marcel Raymond *et al.*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. IV, 1969, p. 700. [『エミール』今野一雄訳、岩波文庫、1962年、17頁]

20 プラトン『国家』457B-C、藤沢令夫訳、岩波文庫、1979年、402頁。

21 Rousseau, « Emile », *op.cit.*, p. 700. [『エミール』下巻、16頁]

22 アリストテレス『政治学』1254a-b、牛田徳子訳、京都大学出版会、2001年、15-18頁。

23 Rousseau, « Emile », *op.cit.*, p. 700. [『エミール』下巻、17頁]

気に入り、役に立ち、男性から愛され、尊敬され、男性が幼いときは育て、大きくなれば世話をやき、助言をあたえ、なぐさめ、生活を楽しく快いものにしてやる」<sup>24</sup>ことと見なしているからである。ルソーがソフィーの教育を通して描く女性は、近代的な主体として自立して生きる人間ではない。このことはルソーが女性に対しては、書物、すなわち表象からの隔離を強く求めることからわかる。

少年エミールが書物に親しむことを要請されるのに対して、少女ソフィーにとっては、たとえ有徳な書物といわれるものであっても、それを読むことは有害なことではない。ルソーによれば「世の中というものがあるのが女性の読む書物だ。よく読めないとしたら、それは女性が悪い」<sup>25</sup>からである。ソフィーは両親から授けられたフェヌロンの『テレマックの冒険』の熱心な読者であったが、あまりにも主人公テレマックに情熱を注いでしまい、実世界の男性に関心がもたなくなってしまう<sup>26</sup>。ルソーによれば、女性は決して書物に親しむべきではなく、結婚して初めて配偶者の指導を受けながら「哲学、物理、数学、歴史、いっさいのこと」を学ぶべきなのである<sup>27</sup>。男性の手ほどきによって女性は学ぶべきという考えはルソーのオリジナルではなく、中世の『アベラールとエロイズ』の例を挙げるまでもなく古くからあるものである。けれども、この挿話から浮かび上がるのは、女性を書物という表象の世界から遠ざけることへの執心と、女性の精神的かつ知的な自立をあくまでも否定しようとする強い姿勢である。

ルソーが女性を自律的な主体として認めていないことは、女兒はお人形遊びをしながら、いつか「自分自身がお人形になる」ときを待ちわびるといふ記述にも見られる。ルソーは、読書を通じて女性が内面的な陶冶を目指すのを有害と見なす反面、お金をかけずに「こなれた」着こなしをすることによって男性を魅惑することを女性の役割とする。ルソーが求める女性のファッションはヴェルサイユで流行している華美で豪華なスタイルではない。女性において、いわゆる華美と豪華を競い合う服飾は、女性同士の間で互いの視線を意識するライバル関係に立脚するものであるが、ルソーが求めるのは、単純に男性目線において魅力的とされ、なおかつ家計に経済的負担をもたらさない、男性にとって都合のよいファッションである。すなわちファッションにおいても、女性は主体的な存在ではなく、あくまでも男性を主体とし、「男性に愛される」、より直接的に言えば、男性に欲望されることを唯一の目的とした客体として存在することが求められているのである。

小さい女の子が一日じゅうお人形を相手にしているのを見るがいい。ひっきりなしに衣裳を変え、いくたびとなく服をきせ、ぬがせ、よく似合っても似合わなくてもかまわずに、たえず新しい組み合わせの身の飾りを工夫している。(中略) その子はまだできあがっていない、才能も体力もない、まだなにものでもなく、すべてはお人形のうちにあって、そこにあらゆ

24 *Ibid.*, p. 703. [同書、21頁]

25 *Ibid.*, pp. 737-738. [同書、70頁]

26 *Ibid.*, p. 762. [同書、108-109頁]

27 *Ibid.*, p. 791. [同書、155頁]

る嬌態を見せているのだ。その子はいつまでもそういうことにうちこんではしまい、やがては自分自身がお人形になるときがくる<sup>28</sup>。

このようにルソーが『エミール』において提案する男女の性別役割分担は、明らかに反近代的なものである。とはいえ18世紀のフランスにおいては、既に論じたように女性は男性に仕え、奉仕するべきであるという考え方は珍しいものではなく、ルソーが論じる男性と女性の間での性別役割分担も一見、他の啓蒙思想家たちが論じる前近代的な紋切り型と取り立てて差異がないように見える。けれどもルソーが提起する男女の役割についての本質的な峻別は、ルソーの市民社会論の根幹をなすものである点において看過できない。『エミール』においては、「男性のみが市民となる資格をもつ」<sup>29</sup>とされ、男性のみが主体性をもった市民となりうるのに対し、女性は市民でない立場にとどまりながら、男性を支援するという役割を任じられる。つまり、ルソーによれば、女性は市民となる資格はもたず、ただ、市民としての男性に仕え、また母として、市民となる男子を育てるという役割を付与されるにとどまることになる。

ルソーは、こうしたすべてを女性の義務とした上で、「あらゆる時代における」女性に普遍的なものであり、男性の習俗、情念、趣味、楽しみ、幸福そのものさえも左右する重要なものとする。これまでルソーの女性観については、メアリ・ウルストンクラフトが1792年に『女性の権利の擁護』を刊行して以来、シモーヌ・ド・ボーヴォワールが1949年に刊行した『第二の性』に至るまで、女性は男児を育て、男性をよろこばせるために存在するという点が長らく躓きの石となり、反近代的なものとして批判の対象となることが多かった。ところが、従来の研究においては、ルソーの女性観は明らかに女性に対する嫌悪を示すものと見なされてきたのに対して、近年においては、ルソーの女性観を単なる女性批判として捉えるのではなく、ルソーの女性観をよりつぶさに検討する考察が現れている。たとえばガブリエル・ラディカやセリーヌ・スペクトールによる最近の研究は、ルソーの近代的女性像がはらむ矛盾を解き明かそうという企図によるものである。

ガブリエル・ラディカはルソーの『ダランベールの手紙』について分析し、ルソーが批判しているのは女性そのものではなく、文明化された習俗に汚された女性であることから、ルソーの女性観は必ずしもミソジニーに基づいたものではないとしている。つまりガブリエル・ラディカによれば、自然の中で田園的習俗を保つ限りにおいて女性は尊重する価値のある対象であり、男性市民の養育者という重要な役割を担う存在として認知されているのである<sup>30</sup>。

いっぽう、セリーヌ・スペクトールはルソーの女性観について『ルソーというプリズムを通して——今日のその政治的利用』という著書に「女性観に関するプリズム」という章を置き、ルソーの女性観が20世紀のフェミニズムの潮流の形成において如何に利用されたかを網羅的

28 *Ibid.*, pp. 706-707. [同書、26-27頁]

29 *Ibid.*, p. 700. [同書、16-17頁]

30 Gabrielle Radica, « Les femmes, les mœurs et le langage dans Rousseau » 『第14回国際18世紀学会報告集』、日本18世紀学会、近刊。



に文献を検証することにより検討している。セリーヌ・スペクトールによれば、ルソーは、近代化された新しい「契約社会」における「不確定」な個人の役割を規定していく過程において、この新しい社会においても正当に女性を位置づけているのである<sup>31</sup>。

こうした近年の研究は、フェミニストたちの批判的となってきたルソーの女性像に関して再検討を提起するものである。実際、『エミール』においては、女性の能力が男性よりも優れているという記述も散見されることから、ルソーを単純な女性蔑視主義者と見なすことはできない。たとえば以下の箇所において、ルソーは男性に対する女性の生得的な優位性を強調し、女性が「男性の権利」を奪うリスクに対する配慮を示している。

こうした問題を検討し解決するにあたっての立場の違いから、相反する極端に陥って、ある人々は、女性を家庭に閉じ込めて召使いたちを相手に針仕事や糸をつむぐようなことだけをさせ、妻を家の主人に仕える女中頭に過ぎないものにして、他の人々は、女性の権利を保障するだけでは満足しないで、さらに、女性にわたしたち男性の権利を奪わせるようなことをしている。女性はその本来の性質においてはいぜんとしてわたしたちよりもすぐれたものにしておいて、ほかのあらゆることではわたしたち男性と同等のものとするというのは、自然が夫にあたえている優位を妻にうつすことにほかならないのではないか<sup>32</sup>。

ルソーによれば、女性が家の中で召使いたちを束ね、ひたすら家の主人に仕えるようにさせるのは、女性の権利を損なうものである一方、女性を「あらゆることにおいて男性と同等」として扱うという過ちを犯せば、男性を凌駕することになり、夫の優位を妻が揺るがすことになるのである。ここに現れているのは、女性に対する嫌悪と言うよりは、端的な恐怖ではないだろうか。ルソーにとって女性とは男性より優れた生きものであり、男性に脅威をもたらす存在と考えられるかもしれない。

このことは『エミール』の続編として書かれた書簡体の小説『エミールとソフィー』をひも解けば一層明らかである<sup>33</sup>。『エミールとソフィー』は、理想の男子として育ったエミールが、家庭教師の手を離れた後の後日談を家庭教師に語るという設定の書簡であるが、そこでは、理想の男女であったエミールとソフィーが田園における生活に程なく倦怠し、パリに出て行く顛末が描かれる。ルソー作品の中では、1761年に刊行され、程なく大ベストセラーとなった『新エロイズ』においても、ヒロインのジュリーが理想の地クラランにおいて年長の男性ヴォルマールとしたたかに平和に営んだ田園的生活が長い小説の最後で悲劇的な形で破綻することは良く知られているが、『エミールとソフィー』に至っては、心やさしき田園的生活はほんの数ページで終焉を迎える。静かな生活に倦んだエミールとソフィーは何ら明確な目的のないまま憑

31 Céline Spector, *Au prisme de Rousseau. Usages politiques contemporains*, Oxford, Voltaire Foundation, University of Oxford, 2011, pp. 227-261.

32 Rousseau, « Emile », *op. cit.*, pp. 730-731. [『エミール』下巻、59頁]

33 Rousseau, « Emile et Sophie », in *Œuvres Complètes*, éd. cit., t. IV, pp. 881-911.

物に憑かれたかのようにパリへと出奔し、パリに着くやいなや二人の心は離れていき、理想の女性であったはずのソフィーは瞬く間にパリの水に染まってリベルティナージュに身をやつしていく。ここでソフィーは、あまりにも早く、ルソーが避けるべきとして徹底的に否認してきた「都会における洗練された軽薄な文化」の犠牲となるのである。ここでは、ルソーが『エミール』という大著において執拗に否認してきた「都会的な洗練」が、アンビバレンスな魅力によって人物たち、またルソー自身を支配する強迫観念にはかならないのが感じられる。理想的な教育の成果であったはずのエミールとソフィーに、「都会的な洗練」による墮落は、あたかも予定調和的な運命として書き込まれていたかのように、不可抗力として襲いかかるのである。

本章においては三つのことを確認した。まず18世紀フランスにおけるミソジニーは、モンテスキューの『法の精神』や『百科全書』の項目「習俗」が示すように非常に通俗的なものであった。ところが、この女性嫌悪は18世紀という時代において、少なくともヨーロッパでは広く受け入れられていたものではない。このことはポーコックの理論を参照するまでもなく、ヒュームやスミスによる女性的な文化への志向を確認すれば明らかである。すなわち、18世紀フランスにおいて文明化や奢侈と結びつけられた女性的な文化への嫌悪は、フランス独自のものであったのである。また、これまでの研究においては、ルソーが文明批判とともに女性嫌悪を広めていったという見方がなされることが一般的であったが、ルソーが描出する女性像は本質的にそれまでの前近代的な女性像とは異なっている。たしかにルソーは、プラトンを批判しながら、男女がそれぞれ性別にしたがって役割分担をすることの重要性を論じているが、ルソーが女性を近代的な市民でも近代的な主体でもない反近代的な存在に矮小化させていったのは、女性を脅威ととらえて、その権限を縮小することに執心したからと考えられる。

第二章では、これまで論じた歴史的、特に思想史的な文脈がどのように、文芸、もしくは言語文化における価値判断に反映されているのかということを確認していきたい。

## Ⅱ. 「男性的」な趣味の回帰と文化的ナショナリズム

18世紀フランスにおいて、道徳的な価値判断の基準となる習俗と対置されていたのは、美的な価値判断の基準である趣味であった。この趣味もまた女性化によって腐敗、もしくは墮落すると考えられていた。ここでは、まず趣味概念の重要性を確認した上で、18世紀フランスにおいて、男性的とされる趣味が称揚されていった過程をたどっていきたい。

### 修辞学における趣味判断の重要性 —— 模倣すべき「古典」の生成

「修辞学」とは、古代ギリシアで「説得の技術」として誕生し、直接民主制のもとで発展した弁論の技術のことである。「修辞学」は、プラトンが、自由人すなわち古代ギリシアにおい

て奴隷とされていた以外の人間には、文芸や幾何学の知識（アルテウス・リーベラーレース）が必要であるとしたことから、「リベラル・アーツ」の一環として発展した。学問体系として完成したものとなるのは、クインティリアヌスが活躍した紀元1世紀ごろのことである。リベラル・アーツは、4～5世紀のローマで、「自由7科」として発展したが、そのうち基本となる「三学」が文法、修辞学、弁証法で、三学の後、「発展過程」として修められるのが算術、幾何学、天文学、音楽であった。一般に、「修辞学」、すなわち欧米言語ではレトリック（rhetoric / rhétorique）と呼ばれるものが書き言葉の訓練であるのに対して、「弁論術」、「雄弁」と訳されるエロカンス（eloquence / éloquence）は口頭弁論の訓練を指す。もともと古代ギリシアでうまれた修辞学は口頭弁論の技術であったが、ルネサンス以降、活版印刷の発明と普及によって書籍が一般に流通するようになったことから、「書きことば」の習得が重視されるようになり、「修辞学」は広く言説の構築に関する方法論と見なされるようになった。

ルネサンス以降、修辞学教育がおこなわれていたのは、イエズス会などの修道院が運営する中等・高等教育機関、コレージュであった。コレージュにおいては、3年または4年の「文法（grammaire）」課程において、ラテン語の文法が習得された後、「レトリック（rhétorique）」課程に進学することになっていた。ルネサンス以降、主にラテン語でおこなわれていた修辞学は、キケロやクインティリアヌスといった、古代ギリシア・ローマの修辞学理論書をそのまま使っていた。しかし17世紀まで「修辞学」はラテン語の習得を主たる目的とする語学教育となっていたことから、「不十分な語学教育」として機能不全に陥っていたとされている<sup>34</sup>。ところが18世紀になると法曹界の拡大、官僚組織の発展、商業ブルジョワジーの台頭などによる身分制社会の流動化にともない、フランス語による修辞学教育が強く求められるようになる。

17世紀後半までのフランスにおいては、古典古代の作品が絶対的な美的価値の基準であったが、修辞学教育においても、ホメロス、ウェルギリウスなど古代ギリシア・ローマの作家の作品の読解をとおして、この美的価値の基準を内面化していくことが重要な位置を占めていた。ヨーロッパの人文主義は、人格の陶冶、習俗の純化、社会秩序の維持を結びつける古代ストア哲学を典拠として、判断力の習得を主要な課題としており、修辞学においては美的価値の基準を内面化することによる美的判断力を養成することが求められていた。修辞学は、言論構築の方法論としては、弁証法、論理学といった学問に株を奪われる形になり、18世紀においては文章を練り上げることよりも、趣味判断能力の習得に重きを置くようになっていった。良い文章を書くためには、自分の文章を読んでそのよしあしを判断するための反省的な能力が必要であると考えられたためである。

18世紀になって修辞学教育がフランス語による文章構成能力の養成を目的とするようになると、まず模範となる作品を探すことが求められた。18世紀のフランス語修辞学教育は、コ

---

34 Françoise Waquet, *Le Latin ou l'empire d'un signe*, Albin Michel, 1998, p. 160.

ルネイユ、ラシーヌなど、フランスの「黄金時代」とされたルイ 14 世期の作家の文学作品を「フランス語の古典」として祭り上げることになるが、この「新しい古典」の選別を主導していたのは、1635 年に設立され、1698 年に最初のフランス語の辞書を刊行するまで、半世紀以上にわたって、国王ルイ 14 世にふさわしい言語を練り上げることに執心したアカデミー・フランセーズであった。アカデミー・フランセーズの言語政策は当初、フランス語の辞書の刊行だけでなく、修辞学理論書の刊行も目指していた。

折しもルイ 14 世が親政を始めたのは、30 年戦争やフロンドの乱が終わった後であり、当時のヨーロッパでは大きな戦争をする必要がなかったため、帯剣貴族の存在感が薄くなり、法服貴族の地位が相対的に上がっていった。また、ルイ 14 世は、リシュリユ、コルベール、マザランの重用に見られるように、出自に関わらず有能な貴族を重要な位置に付ける政策をとった。それまでの宮廷では生まれつきの身分の高低によって社会的地位が固定化される傾向が強かったが、ルイ 14 世は生来の身分にかかわらず、自由に寵臣を選び、自分の気に入った文人を重用することによって、その権力を文字通り絶対的なものとしていったのである。ルイ 14 世期になると宮廷の貴族たちは、ソネット形式の詩を詠んだり、ダンスを踊ることも強いられるようになり、会話においても作法の洗練と社交の精神が求められるようになった<sup>35</sup>。こうしたルイ 14 世期における習俗と趣味の女性化については、近年、ジョルジュ・ヴィガレロらが編纂した『男性性の歴史』が詳細に検討し、ルネサンス期のイタリアやスペインに由来し、カスティリオーネやグラシアンが理論化した「宮廷人」の影響を受けながら、17 世紀フランスにおいてオネットム (honnête homme) が形成された過程をつぶさに描いている<sup>36</sup>。

ルイ 14 世期の宮廷においては、ペローやシャプランといった寵臣が若き君主の「栄光 (gloire)」を称賛の演説にこめることで地位を高めていった。ここでは古代末期のローマ帝国において発展した修辞学の技術が、その柔和な洗練を取り戻すかのように繁栄した。古代の修辞学の技術を継承していたという点において、文筆家は他の芸術家よりも有利であり、国王を讃えれば讃えるほど自らの立場も高くなるという循環が巻き起こった。キケロの修辞学理論を援用するまでもなく、称賛演説によって国王の栄光という称賛の対象を高めることに成功した詩人たちが、自らの地位をも高めるのに成功したのである。このことによって文筆家たちは画家や彫刻家といった他の芸術家とも、あるいは当時ホイヘンスらが活躍していた科学アカデミーの会員とも全く異なる卓越した地位を獲得することになった<sup>37</sup>。

17 世紀の大作家の中でも年長であったコルネイユは、1664 年に「古典叢書 (grande édition « classique »)」において作品が刊行され、フランス演劇の父として聖別されることになった。コルネイユに対する神聖視は、言語を重視する演劇の重要性を認めさせるものであり、演劇が

35 Roger Zuber (avec la collaboration de Micheline Cuévin), *Le classicisme*, GF-Flammarion, « Histoire de la littérature française », 1998, pp. 11-15.

36 *Histoire de la virilité*, sous la direction de Alain Corbin, Jean-Jacques Courtine, Georges Vigarello, Seuil, 3 tomes, 2011.

37 Roger Zuber, *Le classicisme, op.cit.*, pp. 35-37.

社会の文明化に寄与するものと認知されたことの表れである。また悲劇にせよ、喜劇にせよ、古典主義演劇が、必ず、古代ギリシア・ローマの作品を典拠にすることを規則として定めていたことは、古代ギリシア・ローマの文化を国内外の劇場において観衆に広く伝えることになった。

フランスにおいて古典主義の理論が成立した17世紀後半には、古典古代の作品と同時代の作品との優劣を議論する新旧論争が激しくなった。もともと「新旧論争」は、17世紀後半のルイ14世期を「新たな黄金時代」として、古典古代の文明に比肩すると主張する党派が現れたことに端を発している。ここではまず、時代背景を明らかにするためにその経緯を簡潔にまとめておこう。論争の端緒は、まず、1687年にシャルル・ペローが、病から回復したルイ14世を讃えるために、『ルイ大王の世紀』という詩をアカデミー・フランセーズの会議においてラヴォー師に読ませたことと言われている。ペローが、この詩の中で、「自然はどの時代にも、同じ無限の力によって、同じレベルの天才を生み出している」<sup>38</sup>と書いたことに対して、激昂したボワローは『ロンギノスに関する考察』において厳しい非難をおこなった。ペローはさらに翌年、第一巻が出版された『技術と学問に関する古代人と近代人との比較』において「礼儀作法と良き趣味は時代とともに洗練される。そのため当世まで、容認され、称賛されもしてきた古代作家による作品はあらゆる点で耐えがたいものとなっている。(中略)詩は、近代において、古代に見られなかった完成の高みに達した」<sup>39</sup>と述べる。アカデミー・フランセーズの会議で読ませた『ルイ大王の世紀』においては「比肩する」であった論調が、その後の論争のなかでは、17世紀フランスの作家が古典古代の作家より優越しているという主張にとってかわったわけである。しかし、ここでペローが古典古代には見られない近代における画期的な発明として挙げているのは、「オペラ」、「典雅詩 (poésie galante)」、「滑稽詩 (burlesque)」という3つのジャンルであった<sup>40</sup>。この三つのジャンルのうち、「典雅詩」や「滑稽詩」が18世紀になると時代遅れのジャンルと見なされる一方、ボワローやラシーヌなど、古典主義演劇の支持者たちは、オペラも受け入れなかった。このことはユマニズム的伝統を重んじることにより古典古代の文化を伝える17世紀フランス古典主義演劇と「オペラ」との間に序列をもたらしことになる<sup>41</sup>。さらに新旧論争においては、古典古代の作品を擁護する立場に身を置いた文筆家が古典古代の作品を典拠としてフランス語で執筆した作品が高く評価されるようになるにつれて、フランス古典主義文学という新しい潮流が確立し、文学潮流における主流を占めるようになっていく。

古典主義文学、特に古典主義演劇は古代ギリシア、ローマの文化を広める役割を果たしていたが、イエズス会などの修道会は修辞学教育においても積極的にコルネイユやラシーヌといっ

38 Charles Perrault, « Le siècle de Louis le Grand [1687] », in *La Querelle des Anciens et de Modernes*, éd. par Marc Fumaroli, Gallimard, « folio classique », pp. 271-272.

39 Charles Perrault, *Parallèles des Anciens et des Modernes* [1688], Jean-Baptiste Cognard, 1693, p. 189.

40 *Ibid.*, p. 190.

41 Roger Zuber, *Le classicisme*, *op.cit.*, p. 50.

た作家の作品をフランス語の模範として取り入れていった。イエズス会が古代ギリシア、ローマの文化を寛容に受容していったことから、古代の文化と17世紀フランスにおける宮廷文化は特殊な形で融合を遂げることになる。18世紀においてフランス語がヨーロッパで覇権を獲得していく過程において、フランス語で書かれた古典主義演劇は、ヨーロッパ全土のあらゆる観衆を魅了し、そのフランス語はヨーロッパ中で模範となった。古典主義演劇のフランス語は、宮廷において廷臣が話すフランス語を純化した言語と見なされていたからである<sup>42</sup>。演劇は作品の上演を通して、こうした社会的戦略のための原動力となった。フランス国外において、古典主義演劇はバレエやオペラよりも人気があり、当時のフランスが設立した新しいフランス語を広める役割を果たしていた。古典主義演劇におけるフランス語は、ヴェルサイユの宮廷で話される言語のうち、若い貴族たちが戯れに用いた隠語やジャルゴンを排除した形の「洗練されたフランス語」を輸出するという役割を担ったわけである<sup>43</sup>。

### 18世紀フランス修辞学におけるロンギノス『崇高論』と趣味判断

18世紀フランスの修辞学理論書は、多くの場合、言説の構築を時系列において説明する方法論に基づいていた。まず、「書きことば」については、言説の主題にふさわしい話題を発見する方法を論じる「発見法 (invention)」、次に話の題材の配列が「配置法 (disposition)」、主題を語るのに効果的な文体と文彩 (figure) を選択する方法を学ぶ「表現法 (élocution)」という三段階のステップを踏むことが求められた。これを「話しことば」として、すなわち雄弁／弁論術として展開する場合には、上記の三段階のほかに、作成された言説を記憶する方法論である「記憶法 (mémoire)」、聴衆の前でプレゼンテーションをする方法を示す「演示法 (action)」という二段階を加えた五段階を経ることとされていた。近代においては「発見法」「配置法」といった文章作成における根幹的な部分が「弁証法」「哲学」の役割とされることにより、「表現法」の比重が大きくなり、修辞学を文体論と同一視する傾向さえ現れるようになった。修辞学理論書は「表現法」について解説する部分で「崇高」について論じていた。

修辞学理論書は、キケロ修辞学の伝統に倣い、「崇高な文体 (style sublime)」、「簡潔な文体 (style simple)」、「中間的な文体 (style moyen)」という「文体」の三分法を設けていた<sup>44</sup>。すべての文書はこの三つのうちの一つによって書かれるべきであるとされ、文体は言説のジャンルや内容によって選択される必要があった。18世紀には、依然として文学ジャンルにも明白な序列が設定されており、最上位が叙事詩、悲劇、次が喜劇、抒情詩、最下位とされたジャンルが小説であった。文体の三分法は、この三つの分類にそれぞれ対応しており、最上位の叙事

42 *Ibid.*, p. 54-57.

43 Roger Zuber, « Le théâtre classique et l'honnête homme : histoire ou mythe » in *Littérature Classique*, « Mythe et Histoire dans le Théâtre Classique - Hommage à Christian Delmas », 46 (numéro supplément), 2002, pp. 181-183.

44 Cicéron, *De l'orateur*, éd. Edmond Courbaud, Les Belles Lettres, 1971. [大西英文訳『弁論家について』岩波文庫、2005年]

詩、悲劇には「崇高な文体」を、二番目の「喜劇、抒情詩」には「中間的な文体」を、書簡など日常的な文言を書く際には「簡潔な文体」を用いるべきとしていた。

古典修辞学の伝統においては、アリストテレスの『弁論術』と並んで、ロンギノスの『崇高論』が二大典拠とされていた。ロンギノスの『崇高論』は、紀元1世紀にギリシア語で書かれた文書で、実際には作者不詳であるが、19世紀までロンギノスという修辞学者の手によるものとされていたため現在でもロンギノスの名を冠している。この『崇高論』が18世紀における修辞学的发展において重要な役割を果たしたのは、「崇高」を修辞学的な理想としつつ、「崇高」は「趣味=美的判断力の養成」によって実現できるとしたためであった。ロンギノスは『崇高論』において、「崇高さは生まれつきの素質であり、後から習得されることはありえない」と言う考えが広まっていることを認めた上で「その反対のことがいえると思う」<sup>45</sup>と述べている。そしてさらにロンギノスは、崇高さを生み出すためには判断力の養成が不可欠であることを明示する。ロンギノスによれば、「崇高」は「天才 (génie)」すなわち天からのインスピレーションと「趣味判断 (goût)」すなわち判断力の相互作用によって生じるものであり、修辞学的訓練は判断力を一種の技術として涵養することを可能にするものなのである。このようにロンギノスの『崇高論』の流行は、修辞学教育を必要なものとして認知させる役割を果たしたことから、17世紀後半から18世紀にかけて修辞学の学問的復活の一翼を担うことになり、17世紀末から18世紀にかけて数多く出版された修辞学教科書に大いに影響を与えた。

たとえば、歴史家シャルル・ロランが執筆した修辞学理論書は、ロンギノスの『崇高論』を援用して、以下のように修辞学教育における美的判断、すなわち趣味の養成の重要性を論じている。「ロンギノスの優れた崇高論において、崇高のみが若いひとの趣味を養成することができるのです」<sup>46</sup>。ロランは続く箇所において、「判断」の力が生得的なものとされていたことを批判した上で、ロンギノスを引用して「判断」が習得できるとする。ロランがここで標的としているのは、ヨーロッパの人文主義の伝統の中で、紀元1世紀の修辞学者クインティリアヌスの『弁論家の教育』に対する誤読を典拠として広まっていた「趣味が生得的な能力である」という考え方である。趣味判断については、クインティリアヌスが「判断は(中略)味覚や嗅覚と同様に教育の内容にはならないと私は考える」<sup>47</sup>としている箇所に立脚し、生得的なものという考え方も広まっていた。しかしクインティリアヌスは実際には、言説の構築における反省的な能力を「判断 (jugement)」と「知恵 (sagacité)」という二つの能力として区別し、「判断」を説明不可能な能力、「知恵」を説明可能な能力としている。そして二つの能力のうち、知恵については習得することができるとしていた<sup>48</sup>。

45 Longin, *Du sublime*, Les Belles Lettres, 2003, p. 4.

46 Charles Rollin, *De la manière d'enseigner et d'étudier les belles-lettres par rapport à l'esprit et au cœur*, 1726, Jacques Estienne, p. 100.

47 Quintilien, *Institution oratoire*, Livre VI-VII, éd. Jean Cousin, 1977, p. 70.

48 *Ibid.*, p. 73.

## ボワローによる『崇高論』仏訳とその受容

ロンギノスの『崇高論』は、1674年にニコラ・ボワローがギリシア語からフランス語に翻訳して出版すると忽ちヨーロッパ中で広く流行した。ボワローによる仏訳がヨーロッパ全土からの注目を集めたのは、ボワローが当時王室歴史編纂官に任命されており、フランス文壇における権威であっただけでなく、ボワローが『崇高論』に付した序文において、ロンギノスが明示しなかった「崇高」の概念を以下のように簡潔に定義したことにも起因すると考えられる。

崇高な文体はつねに大げさなことを求める。しかし崇高はたった一つの考え、たった一つの文彩、たった一つの言い回しにも現れる。崇高な文体において有りうるものが、崇高ではないことがある。つまり異常さ、驚きが全くないことは、崇高な文体では有りうるが、崇高ではない<sup>49</sup>。

このようにボワローが「崇高な文体と区別すべき概念」として崇高の定義を行って以来、多くの修辞学理論書は「表現法」の章のうち「崇高な文体」について解説する箇所ですべて「崇高」について言及するようになった。崇高はボワローによって「崇高な文体」の対概念とされて以後、「表現法」、すなわち文体論が論じられる節において、ボワローの定義を参照させるようになったのである。

その嚆矢となったベルナール・ラミの『修辞学』は1675年に初版が出版されたあと増補改訂を重ねていくが、1715年に大幅に改訂された際、1715年の版において「崇高な文体」を解説する章に、それまでの版には存在しなかった一節を加え、ボワローの序文における崇高の定義を一字一句違えず転写している<sup>50</sup>。良く知られているように、18世紀においては、文章に対する「剽窃」や「オリジナリティ」に関する考え方が現代と全く異なっており、著名な作家が書いた文章をそのまま他の作家が転写することは極めて一般的であった。崇高に関する記述についてもまた、シャルル・ロラン、シャルル・バトゥといった著名な修辞学教科書の作者がボワローの「序文」を引用して書いた文章が、そのまま他の教科書に転用され、さらに広く知られるようになるという経緯をたどった。バトゥは講義録において、ボワローの定義を以下のような形で参照しているが、このバトゥの解説は、世紀をとおして、多くの教科書にそのまま転写されることになる。

崇高な文体と崇高と呼ばれるものは別のものであるという指摘がある。すなわち、崇高は時に簡潔な文体でかかれた一つの表現に過ぎない。一方、崇高な文体は時間的に持続するもの

49 Boileau, « Préface de Traité du sublime ou du merveilleux dans le discours, Traduit du grec de Longin [1674] » dans *Œuvres Complètes*, éd. Françoise Escal, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1979, p. 338.

50 Bernard Lamy, *La Rhétorique ou l'art de parler*, éd. Christine Noille-Clauzade, Champion, 1998, pp. 355-356.



であり、上品に力強く展開していくものである<sup>51</sup>。

また1726年に出版されたシャルル・ロランによる修辞学教科書は、17世紀フランスの文学作品を模範例として多く利用した点で先駆的であり、その後出版された修辞学教科書に広く参照された教科書であるが、以下のようにボワローの定義を大きな変更を加えずに転写している。

デプレオー氏 (=ボワロー) は崇高という語によって、この修辞学者 (=ロンギノス) は弁論家たちが崇高な文体と称していたものを意味しているのではないと主張している。そうではなく崇高とは、言説において強い印象を与え、また、作品がわれわれを引き上げ、魅了させ、熱狂させるようにする、この常軌を逸したものの、驚異的なものことである。彼 (=ボワロー) によれば、崇高な文体はつねに大げさなことを必要とするが、崇高はたった一つの考え、たった一つの文彩、たった一つの言い回しの中にも見出すことができる<sup>52</sup>。

17世紀まで、この修辞学概念としての崇高は、古典古代の文学と古代ギリシア語、ラテン語とに固有の価値と考えられており、近代の文学作品には実現できない価値とされていた。ボワローもまた1674年に刊行した『崇高論』序文の初版においては、「崇高」の例として、『創世記』の「神は言われた。「光あれ」こうして、光があった」を引用していた。ところが、1701年に『崇高論』の序文を増補改訂した際に、ボワローは17世紀フランスを代表する作家であるコルネイユを崇高の例として取り上げる。このときボワローが引用したのが、コルネイユの『オラース』において主人公オラースが、自分の息子が敵から逃げ出した際に口にした「死ねばよかったのだ (Qu'il mourût.)」という詩句である。この改訂版において、ボワローはこの一節を「ロンギノスの崇高をよりよく伝えるために、聖書の引用と同じ程度にふさわしい」としている。このようにボワローがコルネイユの詩句を「崇高」としたことは、もともと「崇高」を古典古代の作品固有の価値としていた時代には、大きな物議を醸すことになった。けれども、時が経つとともにコルネイユの詩句は新たな「崇高」の表象として利用されることになる。

1732年に『崇高論』を出版したシルヴァンは、崇高を「再現による崇高」と「感情による崇高」という二種類に分類する。シルヴァンによれば、前者はキリスト教の神を再現することによる崇高、後者は人間の英雄的な感情がもたらす崇高さである。シルヴァンは「感情による崇高」を「激しい怒りや苦しみにうちかつ人間」の姿が引き起こす効果を以下のように定義する。

---

51 Charles Batteux, *Cours d'étude à l'usage des élèves de l'école militaire* [1754], Nyon aîné, 1790, p. 220.

52 Charles Rollin, *De la Manière d'enseigner et d'étudier les belles-lettres par rapport à l'esprit et au cœur*, Jacques Estienne, 1726, pp. 100-101.

崇高ほど人間に自然の偉大さを感じさせるものはない。崇高はただ魂を高めるだけではなく、徳と寛容からくる高邁な自尊心で魂を満たすからである<sup>53</sup>。

このようにロンギノスの『崇高論』を典拠とした「崇高」の概念はシルヴァンにより明白に英雄性と結び付けられ、男性的な価値の称揚に利用されるようになる。このシルヴァンの定義もまた、多くの修辞学教科書に転載されることになったが、特に1764年に出版されたジョークールによる『百科全書』の項目「崇高」(1765年)の冒頭に引用されたことから、アンシャン・レジム末期の修辞学理論書においては、崇高を論じる際に必ず援用されるようになった<sup>54</sup>。

既に述べたように、モンテスキューは『法の精神』において「祖国への愛、真の榮譽への欲求、自己放棄、自己の最も大事な利益の犠牲」<sup>55</sup>を共和制の国家を導く古代的な徳とする反面、君主制の国家は、「君主制の国家は、この徳と無関係に存続する」としている。君主制の国家においては、女性的な文化が支配的であり、「人民が有徳であることは極めて難しい」ことから、英雄的すなわち男性的な価値は必要ではないとするのである。つまりモンテスキューの政体分類理論は女性的な文化が支配的であることを容認する立場をとっており、「古代的な徳」を「古人の中に見出し、単に話に聞いただけのあの英雄的な徳」として懐古するのに対して、ボワローの『崇高論』の序文に描かれたコルネイユに対する礼賛と、この序文を典拠として発展した「英雄的崇高」の理論は、古代に失われたまま、近代には見出されないとされてきた、モンテスキュー的な「徳」を近代に甦らせる役割を果たしているのである。

### 文体における都市的な洗練 (urbanité du style) の流行と衰退

18世紀フランスにおける、女性的な文化に対する批判と男性的な価値の称揚は、修辞学の理論にもジェンダー的イデオロギーを表出させる。ルイ14世の治世において、フランスの文壇では「都市的に洗練された文体 (urbanité du style)」という贅辞が流行していた。流行の契機になったのは、ヴォワチュールやバルザックといった作家たちであるが、この「都市的に洗練された文体」が目指していたものは、古代ローマのキケロ、セネカを模範とした装飾的で華やかな文体のことであった。一方、この「都市的な洗練」の対概念とされていたのは、「アッティカの文体 (style attique)」である。アッティカのという形容辞は、古代ギリシア、とりわけ古典期のアテネやスパルタにおいてリュシアスなどの弁論が体現した簡潔な明晰さの男性的な価値を示していた。17世紀のフランスにおいては、古代ローマにおける文体と古代ギリシアにおける文体が対比され、その双方に価値が見出されていたわけである。修辞学理論書に

53 Silvain, *Traité du sublime à monsieur Despreaux, où l'on fait voir ce que c'est que le sublime et ses différentes espèces ; quel en doit être le style : s'il y a un art du sublime, et les raisons pourquoi il est si rare*, Pierre Prault, 1732, Slatkine Reprints, 1971, p. 6.

54 Chevalier de Jaucourt, art. « Sublime » de l'*Encyclopédie ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*, Neufchâtel, Samuel Faulche, 1751-1765, Stuttgart-Bad Cannstatt, Friedrich Frommann Verlag, 1988, t. XV, p. 566a.

55 Montesquieu, *op.cit.*, pp. 255-256. [前掲書、第3編、上巻、76-79頁]

おける文体論において、この「都市的に洗練された文体」は18世紀中葉までは広く価値を認められていた。ところが、ルソーは『学問芸術論』の冒頭において、学問、文学、芸術を批判する際にこの「都市的な洗練」をもった習俗に対して辛辣な批判を展開する。

肉体の欲求は社会の基礎となり、精神の欲求は社会の魅力となる。政府と法が集団としての人間の安全、幸福に必要なものを与えているのに対して、学問、文学、芸術は、それほど専制的ではないが、おそらくはるかに強力なものであり、人間がつながれている鉄鎖を花飾りでおい、人間がそのために生まれてきたと思われる根源的な自由の感情を抑圧し、奴隷状態を人間に好ませ、いわゆる洗練された国民なるものをつくりあげている。欲求が王座を築きあげ、学問と芸術がそれを強固にしたのだ。地上の権力者たちよ、もろもろの才能を愛し、そしてそれをつちかう者たちを保護したまえ。洗練された人々よ、みずからの才能をつちかうがよい。幸福なる奴隷たちよ、諸君たちが誇りとしている繊細で洗練された趣味は、そうした才能にもとづいているのだ。諸君たちの交際をきわめて社交的かつ円滑なものにしている穏和な性格と優雅に富んだ習俗 (*urbanité de mœurs*)、一言にして言うならば、いかなる徳もそなえずして、いっさいの徳をそなえているような外観もそうした才能に基づいている<sup>56</sup>。

『学問芸術論』以後、「都市的な洗練」はローマ的な文体の美というそれまでの意味を失い、以後、肯定的な賛辞としては用いられなくなっていく。さらにギリシア的な簡潔で力強い文体という含意をもつ「アッティカの文体」の対義語は、「アジア的文体」とされるようになる。

ここで言うアジアは、モンテスキューが『法の精神』において、「専制」によって統治されていると分類する、隷属状態を特徴とする地域である。モンテスキューはアジアとヨーロッパの気候の違いについて、まず以下のように述べる。「アジアには本来の意味での温帯がない。そして、酷寒の風土に位置する土地が直接酷暑の風土に位置する土地、すなわち、トルコ、ムガル、中国、朝鮮、日本と接している。ヨーロッパでは、反対に温帯が非常に広がっている」<sup>57</sup>。その上で、アジアにおいては隷属状態が生じる理由を以下のように論じている。「アジアでは、諸国民が、強者対弱者として相対立する、すなわち、戦士的で勇敢かつ活動的な民族が、柔弱 (*efféminnés*) で、怠惰で、臆病な民族と直接隣り合うという結果になるのである。それゆえ、一方は被征服民と、他方は征服民とならざるをえない」<sup>58</sup>。ここでモンテスキューは、アジアの国々が「強い国＝寒い国」と「弱い国＝暑い国」との極端な構成によって成り立っており、「弱い国＝暑い国」の人間について、「柔弱で、怠惰で、臆病」としている。つまりアジアとは、「柔弱 (*efféminnés*)」すなわち女性的とされる民族が「強い国＝寒い国」に征服され、隷属を余

56 Rousseau, « Discours sur les arts et sciences », *op.cit.*, pp. 6-7. [『学問芸術論』14頁] 下線は引用者による。

57 Montesquieu, *op.cit.*, p. 108. [前掲書、第17編、中巻、108頁]

58 *Id.*

儀なくされている地域なのである。この強く自由なヨーロッパと弱く無気力なアジアという二項対立は、文体の理論にも導入され、アジア的文体は、冗長で文体的な装飾の多い女性的な文体として貶められることになる<sup>59</sup>。このように18世紀フランスにおけるミソジニーとナショナリズムは、女性的な文化に対する批判と男性的な価値に対する称揚を文体論にも導入していく。第三部においては、フランスにおいて言語文化においても支配的となった、このミソジニーとナショナリズムが英語圏においてどのように展開していったかを明らかにしたい。

### Ⅲ. バーク『崇高論』と文化的ナショナリズム

#### バークによるフランスの位置づけ ——『崇高と美の起原』と『フランス革命の省察』

ボワローによるコルネイユの称賛をもとに、シルヴァンなどが発展させた「英雄的崇高」の概念は、英語圏において新たな発展を見る。エドモンド・バークは『崇高と美の起原』において、女性的な価値である「美」と男性的な価値である「崇高」を対置し、「崇高」の優位を説きながら序列を付ける。本稿においては、バークによる「崇高」と「美」の対置を分析し、この新たな美学的イデオロギーのジェンダー性を分析することによって締めくくりたい。

ボワローが仏訳した『崇高論』は、英語圏においても衆目を集めることになった。イギリスでもギリシア語から直接英訳された翻訳が、数世紀にわたって複数出版されていたが、『崇高論』が一般に知られる書物となったのは、やはりボワローの訳書をとおしてである。ボワロー訳は、その後、1739年にウィリアム・スミスによってフランス語から英語に翻訳されたことによって、さらに広く読まれるようになる。18世紀の英語圏の修辞学理論が同時代のフランス修辞学を広く参照していたことはスミスやヒュー・ブレアーによる修辞学理論書のタイトルからも明らかであるが、ロンギノスの『崇高論』もまた、古典古代から、一旦同時代のフランスを迂回する形で普及したわけである。

ところが、イギリスにおいては、ボワローの「序文」における定義を最大の権威としたフランスとは全く異なる「崇高」論が発展していく。18世紀における英語圏の崇高論として特に知られているのは、1757年に出版されたエドモンド・バークの『崇高と美の観念の起原』であるが、このバークの著作は、1674年におけるボワローの『崇高論』仏訳刊行以後に英語圏において崇高に関してなされた数多くの議論から着想を得て書かれた集大成とも言える作品である<sup>60</sup>。英語圏における崇高概念の推移を辿ってみると、畏怖の感情のもたらす悦楽を崇高と

59 Fabrice Butlen, « Asianisme ou atticisme ? Les Huit Oraisons de Cicéron (1638), traduction manifeste des « Belles infidèles », *Dix-septième siècle*, 2/2003, (n° 219), pp. 195-216.

60 18世紀の英語圏における崇高論の発展にかんしては以下の文献を参照されたい。Samuel Monk, *The Sublime, a Study of Critical Theories in XVIII-Century England*, Modern Language Association of America, 1935 ; Andrew Ashfield, Peter de Bolla, *The Sublime : a Reader in British Eighteenth-Century Aesthetic theory*, Cambridge University Press, 1996 ; Baldine Saint Girons, « Avant-propos » pour Burke, *Recherche philosophique sur l'origine de nos idées du sublime et du beau*, [Première

定義づけたバークの崇高論は、それまでの多くの論者たちの考えを体系化する試みであったことがわかる。

イギリスにおいて、最初に崇高と畏怖の感情を結び付けたのは劇作家・批評家のジョン・デニスである。デニスは、1688年に書かれた『トリノからの手紙』において「悦ばしき恐怖 (delightful horror)」という撞着語法を用いたことで知られている。デニスによれば、崇高の感情を生じさせる「情念 (passions)」は、その強度を増すときに、「熱狂 (enthusiasm)」となるが、もっとも強い情念、すなわち熱狂的な情念 (enthusiastic passion) を引き起こすのは、畏怖 (terror) の念であることから、この畏怖こそが崇高を生じさせるというわけである<sup>61</sup>。

このデニスによる新たな崇高観は、アディソンが『スペクテイター』において「悦ばしき恐怖」という表現を好んで用いたことから徐々に広まっていく<sup>62</sup>。デニスが文芸修辞学の理論に立脚して文学作品について論じていたのに対して、アディソンは文学作品などの表象がもたらす快を「二次的な快」と位置付ける一方で、自然を鑑賞することによる快を「一次的な快」として上位に置いていた。このことからイギリスでは崇高は、修辞学における崇高論から離れて、主に自然の風景のもたらす感情を指すようになり、ウィリアム・ギルピンの『風景論』に立脚して盛んになったピクチャレスクの美学とともに流行するようになる。

バークは『崇高と美の起源』において、「崇高」を「美」という対概念を用いて定義し、「美」が純粋な「快」を原因とするものであるのに対して、「崇高」は「恐怖」をその源泉とするものとしている。

大きさについて言えば、崇高な物が巨大であるのに対して、美しい物は比較的小さい。美が滑らかで磨き抜かれているのに対して、偉大さには起伏があって手が加えられていない。美は、それとわからないように直線を選べる。直線を好み、直線でなくなるときには激しく屈曲することが多い。美は暗いものであってはならないが、偉大さは陰鬱なものである。美は明るく繊細であり、偉大さは硬くて重い。崇高と美は本当に非常に性質の異なる観念である。崇高が苦に立脚しているのに対して、美は快に立脚している<sup>63</sup>。

つまり、バークによれば、「美」が「小さい」「柔らかい」「滑らか」「明るい」といった「ロココ的」な性質である一方、「崇高」は、「ピクチャレスクの美学」を継承する偉大さ、すなわち暗く陰鬱で、ゴツゴツとした恐ろしいものである。ここでバークは「美」を「愛情や優しさの感

---

édition du texte original : 1757], éd. Baldine Saint Girons, 1990, 2<sup>ème</sup> éd. revue et augmentée, Vrin, 1998.

61 John Dennis, « Proposal » dans *The Grounds of Criticism in Poetry* [1704], éd. John Vladimir Price, Rutledge / Thoemmes Press, 1994, pp. 78-79.

62 Addison, *The Spectator*, éd. Donald F. Bond, Oxford at the Clarendon Press, 1987, n° 412 [Monday, June 23, 1712], t. III, p. 540.

63 Edmund Burke, *A philosophical enquiry into the Sublime and Beautiful* [1757], Penguins Books, 1998, p. 157.

覚、もしくはそれらに良く似た情念を呼び起こすような性質」として、「愛」と「社交」をその源泉とする。パークは、愛や社交がもたらす「快」を強調することによって、本論の冒頭で引用したスコットランドの同時代の思想家ヒュームと同様に、「商業社会」の発展がもたらす利点を論じている。しかし、このパークの「美」の定義は、やはり商業社会の発展がもたらす女性的な文化の価値を限定するものと言えるのではないだろうか。

これまで見てきたように、18世紀フランスにおいては「女性的な価値」が男性性をおびやかす脅威とされていたのに対し、英語圏においては商業と女性が発展させる文化は肯定的に受け入れられてきた。ところがパークは、崇高の概念に男性性を、美の概念に女性性を付与することで、この二つの概念を対置させ、序列を付けた。つまりパークは『崇高と美の起源』において、「崇高」という男性的な概念を積極的に称揚することによって、フランスが育んだロココ的、女性的な文化を下位に位置づけているのである。

ここではさらに、パークが『フランス革命に関する省察』（1790年）においてマリー・アントワネットの幽閉に関して論じている箇所を分析することによって、パークがフランスを「女性的な文化」が栄えた国と位置づけていることを確認していきたい。パークは『省察』において、マリー・アントワネットが幽閉されたことについて「任侠な人びとの国（nation of gallant men）、名誉と騎士道の国にあって、かの女がこのような災厄にであうのを、私がいちあつて見ようとはゆめにもおもわなかった」と述べて強く非難し、革命以前のフランスの美点を列挙する。また、その美点が革命によって全て踏みにじられ、失われたことを嘆き悲しむ。

騎士道の時代はすぎさつた。詭弁家・経済人・計算家の時代がそれにつづいた。そして、ヨーロッパの光栄は永遠にきえうせた。たかい身分と女性にたいするあの寛大な忠誠、あの誇らかな服従、あの威厳のある従順、あの心からの服属、たかめられた自由の精神を奴隷状態自体のなかにおいてさえいきいきとたもったこれらのものを、われわれはけっしてふたたび見ることがないだろう。金銭づくでない生活上の優雅、諸国民の安価な防衛、男らしい感情と英雄的な行為をはぐくむものは、すぎさつた。あの大義名分感、名誉への貞節は、すぎさつた。それは、汚名を傷と感じ、残忍さをくじくとともに勇気をふるいたたせ、ふれるすべてを高尚にし、そのもとでは悪徳自体でさえ、そのすべての粗暴さを失うことによって、その害のなかばを失つたのである<sup>64</sup>。

ここでパークは、フランスを女性を尊重する国とした上で、フランスにおける女性を尊重する文化の起源を中世の騎士道精神に置いている。パークは、この騎士道精神を近代ヨーロッパの

---

64 Edmund Burke, *Reflections on the Revolution in France* [1790], ed. by L. G. Mitchell "The world's classics", Oxford University Press, 1993, p. 76. [水田洋・水田珠枝訳『フランス革命についての省察』中央公論新社、〈中公クラシックスW25〉、I巻、2002年、139頁]

根源的な理念とした上で、近代のヨーロッパが「古代世界のもっともすぐれた国々」に対しても、同時代のアジアに対しても優越しているのは、封建制という身分制度によって「高貴な平等」を実現したからと述べる<sup>65</sup>。パークによればフランス革命においてマリー・アントワネットが幽閉されたことは、この女性を尊ぶ騎士道精神そのものを否定し、近代ヨーロッパの理念そのものを破壊する行為であった。フランス本国においては、フランスの起源とされていたのは、あくまでも古代ギリシア・ローマの文化であったのに対し、ここでパークは、女性を尊ぶフランスの文化の根源を中世ヨーロッパの封建制としている。

パークが『崇高と美の起源』の初版を刊行したのは1757年、『フランス革命の省察』を刊行したのは1790年であるが、それぞれの論考がフランスと女性的な文化を直接結びつけているのは特筆に値する。世紀半ばに『起源』において、パークが「美」という概念を用いて論じたのがフランスの宮廷において発展した典雅なロココ文化であったのに対して、『省察』ではフランスは中世の騎士道精神を近代ヨーロッパにおいて最大限に発展させた国とされている。しかしフランス本国の思想潮流からしてみると、いずれの議論も意に添わないものであろう。フランスでは、ロココ文化に象徴される女性的な習俗や趣味は、本来の古代的な習俗や趣味が墮落、もしくは腐敗した結果と考えられており、フランスは自国の文化の起源をあくまでも古典古代に求めていたからである。つまりパークがフランスを「女性を尊重する国」としているのは、フランス側から見ると、侮蔑的な扱いにほかならなかったのである。1770年にルイ16世と結婚し、宮廷においてロココ文化の粋を築いたマリー・アントワネットは、上述したように1780年代には「習俗と趣味の退廃」の象徴としてエロティックな誹謗文書による攻撃の標的となっていた。このようにパークが、フランスを宮廷文化とマリー・アントワネットという二つの表象から描き出す背景には、パーク自身が「崇高」を利用して英語圏における文化的ナショナリズムの興隆に積極的にコミットしていく過程がある。次章においては、パークによる『オシアン』論争への介入、パークの崇高論を援用したヒュー・ブレアーの英語修辭学のイデオロギー性について検討したい。

### 『オシアン』の崇高をめぐって

パークは1759年に『崇高と美の起源』の第二版が刊行された際に、序論として冒頭に「趣味について」という文章を付け加えた。ここで展開される趣味論は、しかし、ハチスンやヒュームが論じる相対的な趣味ではなく、ロンギノスに立脚するフランス修辭学の流れを汲む絶対的な趣味である。つまり、英語圏においてはこのパークによる「趣味論」が刊行されるまで、趣味については議論できないという考えが主流であったのに対して、パークはここで絶対的な判断基準を前提とするフランス修辭学的な趣味判断を論じている。その上でパークは『崇高と美の起源』を執筆した後も「崇高な作品」の選別と評価に積極的に関わっていく。たとえばバ

---

65 *Ibid.*, p. 76. [同書、139-140頁]

ークは、スコットランドで1760年にジェイムズ・マクファーソンが出版に着手した『オシアン』については、その崇高さに注目するように繰り返し論じていく<sup>66</sup>。18世紀のスコットランドにおいて、マクファーソンがスコットランドの古歌を収集して刊行した『オシアン』は世紀後半において激しい真贋論争を巻き起こしたことで知られている。『オシアン』は刊行以来ずっと極端な毀誉褒貶にさらされることになるが、バークは『オシアン』を本物であると主張した上で、なおかつ「崇高」であるとしてひたすら擁護するのである。

ところが良く知られているようにバークが『オシアン』を崇高としたことは大変な物議を醸した。その騒動の背景には18世紀初頭にフランス修辞学が生み出した「新しい古典」と「崇高」との関係がある。つまり『オシアン』が崇高であるとするならば、それは『オシアン』には古典古代の作品に比肩する価値をもち、『オシアン』が「新しい古典」として機能するという証だからである。修辞学は、国語の整備という作業をとおして、民族のアイデンティティの顕揚に大きく貢献していたが、ここで『オシアン』の真贋が問題となったのは、文化的ナショナリズムの起源を保証する「崇高な」作品であるかどうか問われたからである。『オシアン』は、その後英語圏の修辞学教育においてホメロスに比肩する真正な国民叙事詩として認められ、19世紀末にいたるまでフランスをはじめとする諸外国においても、新たに発見された「古典」として大いに注目されることになる。

18世紀のスコットランドにおいて、このマクファーソン版『オシアン』の最大の擁護者は、エディンバラ大学において修辞学の教授であったヒュー・ブレアーであった。ブレアーはまず、1763年に『オシアン詩集に関する批判的論説』を書いて論陣を張り、続いて、1783年に『修辞学と文学に関する講義』という修辞学教科書を出版して、『オシアン』を近代における「崇高」な作品の代表として取り上げる。ブレアーは、1783年に出版された『修辞学と文学に関する講義』において、「崇高」について以下のように述べている。

『オシアン』は崇高の見本に事欠かない。(中略) これほど畏怖の感情を喚起する崇高のイメージが戦乱の恐怖を高めるために用いられたことはなかった。私が上の例を挙げたのは、飾り気のないことが崇高な作品においてどれほど重要かということを示すためである。私が飾り気のなさの対局に置くのは、わざとらしく、過度な装飾であり、簡潔さの対局に置くのは、余分な表現である<sup>67</sup>。

ヒュー・ブレアーの『修辞学と文学に関する講義』は、同時代にとどまらず、19世紀においても再版を重ね、スコットランドで英語修辞学が発展する過程において重要な役割を果たした。ブレアーの『講義』は、ここで「戦乱が崇高である」という新しい価値観を生じさせてい

66 Edmund Burke, "A Dissertation concerning the Antiquity, &c. of the Poems of Ossian the Son of Fingal" in *The Annual Register*, 1762, pp. 277-286.

67 Hugh Blair, *Lectures on Rhetoric and Belles Lettres* [1783], edited by Linda Ferreira-Buckley and S. Michel Halloran, Southern Illinois University Press, 2005, p. 36.



る。18世紀フランスの修辞学における「英雄的崇高」の「英雄」にとって、実際に戦う場面が描かれることはほとんどなかった一方で、『オシアン』評においては「嵐」の比喩によって描かれる戦いの描写そのものが崇高という評価を受けるようになる。

陽気で美しいものは、晴れ晴れとした風景、楽しいテーマによりふさわしい。しかし荒涼とした自然の風景、岩山、急流、つむじ風、戦争の場面などは、崇高に適している。(中略) 崇高には、恐ろしく、また厳粛な感情が似合い、崇高は、騒乱、畏怖の感情、暗闇のイメージによって高められるのがよい<sup>68</sup>。

ここで描写されている『オシアン』の崇高は、英語圏において表出した「風景がもたらす畏怖の感情」である。陰鬱で凄惨な場面を「崇高」と捉える英語圏固有の感性と、古典修辞学、特にロンギノスの『崇高論』に立脚した「英雄的崇高」の融合は、「崇高」と「戦乱の表象」とを結びつける役割を果たしていた。しかし、英語圏において発展した「崇高」が、「荒涼とした風景」や「暗闇」そのものを崇高と呼んでいたのに対して、ブレアーは、こうした恐ろしい風景を崇高の「背景」としてとらえている。ブレアーにとって「陰鬱な景色」は、それ自身が「崇高」というよりは、むしろ場面の崇高さを高めるための演出なのである。しかしブレアーが『オシアン詩集に関する批判的論説』において行った崇高に関する議論が立脚していたのはバークの崇高論だけではない。ブレアーは、ポワローが強調する「驚き」についても言及しているほか、シルヴァンの崇高論からは「感情による崇高」と「記述による崇高」という二つの概念も取り入れている。このため『オシアン』を題材に論じられる崇高は、18世紀フランスに現れた「英雄的崇高」の側面も兼ね備えており、バークが描いた「陰鬱な」崇高の世界と同時に、アンシャン・レジームのフランスが発展させた「英雄的」崇高を同時に体現しているのである。「畏怖の感情によって魂を高める」ことを目指す、この「陰鬱で英雄的な崇高」は、『オシアン』をホメロスに並ぶ国家的な神話と讃える美学的な根拠となり、ヨーロッパに新しいナショナリズムの形を育んでいく。実際、19世紀にシャトブリアン、ユゴーといったフランス・ロマン主義の詩人たちに礼賛されたのは、この新しい崇高であった。『オシアン』の流行によって、英語圏ではロマン主義の色を帯びた新しい崇高概念が文化的ナショナリズムを高揚させた一方、19世紀フランス・ロマン主義詩人たちの称賛的となるのは、さらにフランスに「逆輸入」と言ってもよい形で移入された、この新しい崇高概念の表象となる『オシアン』だったのである。

---

68 *Id.*

## 結論

16世紀から17世紀にかけて、フランスにおいては、宮廷やサロンを中心として女性的な文化が発展したことが知られている。この、フランスにおいて発展した女性的な文化は、スコットランドなど近隣の諸国では、商業の発展による文化的洗練として肯定的に受容されていく。ところが18世紀のフランス本国では、商業によって発展する女性的な文化は、「習俗や趣味を退廃させる」として非難の対象になる。本論においては、まず、この18世紀フランスに固有の女性文化批判に対して、モンテスキューの『法の精神』、ルソーの『エミール』などを分析することによって検討した。モンテスキューは『法の精神』において、フランスのような君主制の国家には古典古代に求められた徳が存在せず、習俗が墮落していると論じており、この習俗の墮落を導く主因を女性としている。このモンテスキューによるミソジニーは、新しいものではなく、あくまで前近代的なものであるが、その後も『百科全書』の項目「習俗」などに酷似した記述が見られるなど、強い影響を保ち続ける。一方、ルソーが『エミール』、『エミールとソフィー』において描出する女性は、男性よりも生まれつき優れた存在であるにもかかわらず、市民として政治に参加することを認められず、男性の欲望の対象になり、市民となる男性を産み育てることのみを任じられる。ルソーの求める女性像は、近代社会の構成員として想定されながら、つねに男性に従属する反近代的な存在なのである。

他方、言語文化に関しては、従来、ラテン語でおこなわれていた修辞学が18世紀初頭以降、フランス語で習得されるようになり、新しい言語的模範となる作品が求められるようになった。18世紀の修辞学は、優れた作品を数多く読み、検討することによって、作品に対する美的判断力を養成することを目指していた。この美的判断力は「趣味」と呼ばれていたが、フランスの修辞学理論において趣味判断は絶対的な基準に基づくものと考えられていたため、模範となる作品を選定することが求められた。フランス語の作品において、まず模倣すべき模範とされたのは、ボワローが『崇高論序文』を1701年に増補改訂した際に、フランス語の作品にも崇高なものがあるとして付け加えたコルネイユの詩句である。このコルネイユの詩句は、近代が生み出した英雄的崇高として機能するようになる。またこのボワローによる崇高論の新訳は、英語圏においても流行し、独自の崇高美学を生成する。エドモンド・パークの崇高論は、英語圏における崇高美学の集大成として現れるが、ロココ文化の香る女性的な価値である「美」をロマン主義の色を帯びた男性的な価値、「崇高」と対置させることにより、矮小化させることになる。パークは『崇高と美の起源』の刊行の3年後にスコットランドで刊行された『オシアン』の流行を後押ししたことから、ロマン主義的な新しい崇高概念がナショナリズムを高揚させる契機を導いた。その後、19世紀フランス・ロマン主義詩人たちの称賛的となるのは、この新しい崇高概念の表象となった『オシアン』である。この『オシアン』讃をととした軍事的なナショナリズムの高揚もまた、「男らしさ」を確認する所作となった。

## 参考文献

### (1) 古代の文献

- ARISTOTE, *Rhétorique*, éd. Médéric Dufour et André Wartelle, Paris, Les Belles Lettres, 1989. [アリストテレス『弁論術』戸塚七郎訳、岩波文庫、1992年]
- , *Politique*, éd. Jean Aubonnet, Paris, Les Belles lettres, 1989. [アリストテレス『政治学』牛田徳子訳、京都大学学術出版会、2001年]
- CICÉRON, *De l'invention*, éd. Guy Achard, Paris, Les Belles Lettres, 1994.
- , *De l'orateur*, éd. Edmond Courbaud, Paris, Les Belles Lettres, 1971. [キケロ『弁論家について』大西英文訳、岩波文庫、2005年]
- , *L'Orateur*, éd. Albert Yon, Paris, Les Belles Lettres, 1964.
- LONGIN, *Du Sublime*, éd. Henri Lebègue, Paris, Les Belles Lettres, 1965.
- , *Du Sublime*, éd. Jackie Pigeaud, Paris, éditions Rivages, 1991.
- , *Traité du sublime*, éd. Francis Goyet, Paris, Le Livre de Poche, « Bibliothèque classique », 1995.
- PLATON, *Œuvres complètes*, tome VII, 2e partie: « La République », Livres VIII-X, éd. Emile Chambry, 1934, 2011. [プラトン『国家』藤沢令夫訳、岩波文庫、1974年]
- QUINTILIEN, *Institution oratoire*, éd. Jean Cousin, Paris, Les Belle Lettres, 1975-1979. [クインティリアヌス『弁論家の教育』森谷宇一ほか訳、京都大学学術出版会、2005-2013年]

### (2) 16-18世紀の文献

- Ratio Studiorum, Plan raisonné et institution des études dans la Compagnie de Jésus* [1599], présentée par Adrien Demoustier et Dominique Julia, traduite par Léone Albrieux et Dolorès Plalon-Julia, Marie-Madeleine Compère, Paris, Belin, 1997.
- ADDISON, *The Spectator*, edited by Donald F. Bond, Oxford at the Clarendon Press, 1987.
- ANDRÉ (Père), *Essai sur le beau*, Paris, J. Guérin, 1741.
- ARNAULD Antoine, NICOLE Pierre, *La Logique ou l'art de penser* [1662], éd. Dominique Descotes, Paris, Champion, 2011.
- BATTEUX Charles, *Les Beaux-Arts réduits à un même principe*, Paris, Durand, 1746.
- BAUMGARTEN Alexander Gottlieb, *Esthétique* [1750-1758], éd. Jean-Yves Pranchère, Paris, L'Herne, 1988. [アレクサンダー・ゴットリーブ・バウムガルテン『美学』松尾大訳、講談社学術文庫、2016年]
- BOILEAU, *Œuvres Complètes*, éd. Françoise Escal, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1966, 1979.
- BURKE Edmund, *A philosophical enquiry into the Sublime and Beautiful* [1757], London, Penguins Books, 1998. [エドマンド・バーク『崇高と美の起源』大河内昌訳、研究社、

2012 年]

- , *Recherche philosophique sur l'origine de nos idées du sublime et du beau* [1757], éd. Baldine Saint Girons, 1990, 2ème éd. revue et augmentée, Paris, Vrin, 1998.
- , “A Dissertation concerning the Antiquity, &c. of the Poems of Ossian the Son of Fingal” in *The Annual Register* [1762], pp. 277-286.
- , *Reflections on the Revolution in France* [1790], edited by L.G. Mitchell, Oxford University Press, “The world’s classics”, 1993. [バーク 『フランス革命についての省察』 水田洋・水田珠枝訳、中央公論新社、〈中公クラシックス W25〉、2002-2003 年]
- CONDILLAC, *Essai sur l'origine des connaissances humaines*, Amsterdam, P. Mortier, 1746. [コンディヤック 『人間認識起源論』 古茂田宏訳、岩波文庫、1994 年]
- CORNEILLE, *Trois discours sur le poème dramatique*, éd. Bénédicte Louvat et Marc Escola, Paris, GF-Flammarion, 1999.
- CROUSAZ Jean Pierre (de), *Le Traité du Beau* [1715], Paris, Fayard, 1985.
- DENNIS John, « Proposal », *The Grounds of Criticism in Poetry* [1704], edited by John Vladimir Price, London, Routledge / Thoemmes Press, 1994.
- DIDEROT, *Œuvres complètes*, éd. H. Dieckmann, J. Proust et J. Varloot, Paris, Hermann, 23 vol. parus sur 33 vol. prévus.
- FERGUSON, *An Essay on the History of Civil Society* [1767], Cambridge University Press, 1996.
- FRÉRON Élie-Catherine, *L'Année Littéraire*, Amsterdam et Paris, Michel Lambert, Genève, Slatkine Reprints, 1966.
- HUME David, *Essays moral political and literary* [1742], edited by Eugene F. Miller, Indianapolis, Liberty Fund, 1985, 1987. [ヒューム 『道徳・政治・文学論集』 田中敏弘訳、名古屋大学出版会、2011 年]
- LA MOTTE Antoine Houdar (de), *Textes critiques, les raisons du sentiment*, éd. G. Gevrey et B. Guion, Paris, Champion, 2002.
- MARMONTEL, *Œuvres complètes*, Paris, Belin, 1819, Genève, Slatkine Reprints, 1968.
- MONTESQUIEU, *Œuvres Complètes*, éd. par Roger Caillois, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1949.
- , *De l'esprit des lois* [1748], éd. par Roger Caillois, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. II., 1949, pp. 227-1117. [モンテスキュー 『法の精神』、野田良之・稲本洋之助・上原行雄・田中治男・三辺博之・横田地弘訳、岩波文庫、1989 年]
- PERRAULT Charles, « Le siècle de Louis le Grand [1687] » in *La Querelle des Anciens et de Modernes*, éd. par Marc Fumaroli, Paris, Gallimard, « Folio classique », 2001.
- , *Parallèles des Anciens et des Modernes* [1688], Paris, Jean-Baptiste Cognard, 1693.

ROUSSEAU Jean-Jacques, *Œuvres complètes*, éd. Henri Coulet et Bernard Guyon, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1964.

—, « Discours qui a remporté le prix à l'Académie de Dijon. En l'année 1750. Sur cette question proposé par la même Académie : Si le rétablissement des Sciences et des Arts a contribué à épurer les mœurs ( Discours sur les sciences et les arts ) » in *Œuvres Complètes*, éd. par François Bouchardy *et al.*, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade » t. III, 1964, 2003, pp. 3-107. [ジャン=ジャック・ルソー、「学問芸術論」山路昭訳、白水クラシックス『文明』所収、白水社、2012年、7-52頁]

—, « Emile [1762] » in *Œuvres Complètes*, éd. par Bernard Gagnebin et Marcel Raymond *et al.*, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. IV, 1969. [ルソー『エミール』今野一雄訳、岩波文庫、1962年]

SILVAIN, *Traité du sublime à monsieur Despreaux, où l'on fait voir ce que c'est que le sublime et ses différentes espèces ; quel en doit être le style : s'il y a un art du sublime, et les raisons pourquoi il est si rare*, Paris, Pierre Prault, 1732, Genève, Slatkine Reprints, 1971.

SMITH Adam, *Lectures on Rhetoric and Belles Lettres* [1762-63], edited by J. C. Bryce, Indianapolis, Liberty Fund, 1983. [アダム・スミス『文学・修辞学講義』アダム・スミスの会監修、水田洋・松原慶子訳、名古屋大学出版会、2004年]

VAUGELAS Claude Favre (de), *Remarques sur la langue française* [1647], Éditions Ivrea, 1996.

VOLTAIRE, *Œuvres Complètes*, Paris, Garnier, 1877.

—, *Mélanges*, éd. Jacques van den Heuvel, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1995.

—, « Lettres Philosophiques », in *Mélanges*, éd. Jacques Van den Heuvel, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1961. [ヴォルテール『哲学書簡・哲学辞典』中川信・高橋安光訳、中央公論新社、〈中公クラシックス W44〉、2005年]

YOUNG Edward, *Les Nuits d'Young, traduites de l'anglais par M. le Touneur*, Paris, Chez Le Jay, 1769.

### (3) 17-18世紀の修辞学教科書

BARDOU-DUHAMEL, *Traité sur la manière de lire les auteurs avec utilité*, Paris, P.-N. Lottin et J.-H. Butard, 1747-1751.

BATTEUX Charles, *Principes de la littérature* [1747-1748], Paris, Desaint et Saillant, Genève, Slatkine Reprints, 1967.

—, *Cours d'étude à l'usage des élèves de l'école militaire* [1754], Paris, Nyon aîné, 1790.

- BLAIR Hugh, *Lectures on Rhetoric and Belles Lettres* [1783], edited by Linda Ferreira-Buckley and S. Michel Halloran, Southern Illinois University Press, 2005.
- CREVIER Jean-Baptist-Louis, *Rhétorique française*, Paris, Saillant-Dessaint, 1767.
- GARDIN DUMESNIL Jean-Baptiste, *Préceptes de rhétorique tirés de Quintilien, à l'usage des écoliers*, Paris, Brocas et Humblot, 1762.
- HÉRISSANT Louis-Théodore, *Principes de style, ou Observations sur l'art d'écrire recueillies des meilleurs auteurs*, Paris, Frères Etienne, 1779.
- LA MARTINIÈRE Antoine-Augustin-Bruzen (de), *Introduction générale à l'étude des sciences et des belles-lettres, En faveur des personnes qui ne savent que le Français*, La Haye, Isaac Beauregard, 1731.
- LAMY Bernard, *La Rhétorique ou l'art de parler* [1675], éd. Christine Noille-Clauzade, Paris, Champion, 1998.
- LA TOUR Séran (de), *L'Art de sentir et de juger en matière de goût*, Paris, Prault et Pissot, 1762.
- MALLET Edme, *Essai sur l'étude des Belles-Lettres*, Paris, L.-E. Ganeau, 1747.
- ROLLIN Charles, *De la manière d'enseigner et d'étudier les belles-lettres par rapport à l'esprit et au cœur*, Paris, Jacques Estienne, 1726.

(4) 『百科全書』における関連項目

- Encyclopédie ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*, 1751–1765, Neufchâtel, Samuel Faulche, Friedrich Frommann Verlag, Stuttgart-Bad Cannstatt, 1988.
- DIDEROT, « Beau », t. II, 1752, pp. 169b–180b.
- VOLTAIRE, « Gens de lettres », t. VII, 1757, pp. 599b–600a.
- JAUCOURT Chevalier (de), « Goût », t. VII, 1757, pp. 758a–761a.
- D'ALEMBERT, DIDEROT, VOLTAIRE, MONTESQUIEU, « Goût », t. VII, 1757, pp. 761a–770b.
- BLONDEL, « Goût », t. VII, 1757, p. 770b.
- « Mœurs », t. X, 1765, p. 611b.
- JAUCOURT Chevalier (de), « Parallèle », t. XI, 1765, pp. 906b–907a.
- JAUCOURT Chevalier (de), « Sublime », t. XV, 1765, pp. 566a–570b.

(5) 先行研究

- Histoire de la virilité*, sous la direction de Alain Corbin, Jean-Jacques Courtine, Georges Vigarello, Paris, Seuil, 2011.
- ADAM Antoine, *Histoire de la littérature française au XVII<sup>e</sup> siècle* [1948–1956], Paris, Albin

- Michel, 1996.
- BALIBAR Renée, *L'institution du français, essai sur le colinguisme des Carolingiens à la République*, Paris, PUF, 1985.
- , *Le Français National, Politique et pratiques de la langue nationale sous la Révolution Française*, Paris, Hachette, 1972.
- BARNOUW Jeffrey, « The Morality of the Sublime : to John Dennis » in *Comparative Literature*, University of Oregon, 1983, (35), pp. 21-42.
- , « Feeling in Enlightenment Aesthetics » in *Studies in Eighteenth-Century Culture*, American Society for Eighteenth-Century Studies, 1988, (18), pp. 323-342.
- BECQ Annie, *Genèse de l'esthétique moderne (1680-1814) : De la raison classique à l'imagination créatrice*, Paris, Albin Michel, 1994.
- BÉNICHOU Paul, *Le Sacre de l'écrivain : 1750-1830 Essai sur l'avènement d'un pouvoir spirituel laïque dans la France moderne*, Paris, José Corti, 1973, réédité par Gallimard, 1996. [ポール・ベニシュー『作家の聖別——フランス・ロマン主義〈1〉近代フランスにおける世俗の精神的権力到来をめぐる試論』片岡大右・原大地・辻川慶子・古城毅訳、水声社、2015年]
- BERNARDI Bruno, *La Fabrique des concepts, recherches sur l'invention conceptuelle chez Rousseau*, Paris, Champion, 2006.
- BERNIER Marc-André, *Parallèle des Anciens et des Modernes. Rhétorique, histoire et esthétique au siècle des Lumières*, Presses de l'Université Laval, 2006.
- BOURDIEU Pierre, *La Distinction : critique social du jugement*, Paris Éditions de Minuit, 1979. [ピエール・ブルデュー『ディスタンクシオン』石井洋二郎訳、藤原書店、1990年]
- BUTLEN Fabrice, « Asianisme ou atticisme ? *Les Huit Oraisons* de Cicéron (1638), traduction manifeste des « Belles infidèles » », *Dix-septième siècle*, 2/2003, (n° 219), pp. 195-216.
- BURY Emanuel, « Balzac et Boileau » in *Littérature classique*, 1998, (33), pp 79-91.
- , « Un idéal de la culture française entre humanisme et classicisme “civiliser la doctrine” » in *Civilization in French and Francophone Literature*, éd by Buford Norman, James Day, “French Literature Series”, Vol. XVIII, 2006, pp. 117-130.
- , « Corneille et la République des lettres européennes » in *Papers on French Seventeenth Century Literature*, XXXV, 68, 2008, pp. 237-249.
- CHOUILLET Jacques, *La formation des idées esthétiques de Diderot, 1745-1763*, Paris, Armand Colin, 1973.
- , *L'Esthétique des Lumières*, Paris, PUF, 1974.
- CORBIN Alain, *Le Temps, le Désir et l'Horreur*, Paris, Éditions Aubier, 1991. [アラン・コルバン『時間・欲望・恐怖——歴史学と感覚の人類学』小倉孝誠・野村正人・小倉和子訳、

藤原書店、1993年]

- CRONK Nicholas, « La Querelle du sublime : théories anciennes et modernes du discours poétique » in *D'un siècle à l'autre : Anciens et modernes, XVI<sup>e</sup> colloque*, Marseille, Centre méridional de Rencontre sur le XVII<sup>e</sup> siècle, 1986, pp. 9-15.
- , *The Classical Sublime : French Neoclassicism and the language of literature*, Charlottesville, Rockwood Presse, 2002.
- DAINVILLE François(de), *L'Éducation des Jésuites (XVI<sup>ème</sup>-XVIII<sup>ème</sup> siècle)*, textes réunis et présentés par Marie-Madeleine Compère, Paris, Éditions de Minuit, 1978.
- DE BOLLA Peter, *The Sublime : a Reader in British Eighteenth-Century Aesthetic theory*, Cambridge University Press, 1996.
- DELON Michel, « Le sublime et l'idée d'énergie » in *Revue d'histoire littéraire en France*, 1986, (1), pp. 62-70.
- , *L'Idée d'énergie au tournant des Lumières (1770-1820)*, Paris, PUF, 1988.
- , « Naufrages vus de loin : les développements narratifs d'un thème lucrétien » dans *Rivista di letteratura moderna et comparate*, 1988, (2), pp. 91-119.
- , « Joseph Vernet et Diderot dans la tempête » in *Recherche sur Diderot et l'Encyclopédie*, 1993, (15), pp. 31-39.
- , *Le Savoir-vivre libertin*, Paris, Hachette Littératures, 2000.
- DELON Michel, MAUZI Robert, MENANT Sylvain, *De l'Encyclopédie aux Méditations, Histoire de la littérature française*, Paris, Flammarion, 1998.
- EHRARD Jean, *L'Idée de nature en France dans la première moitié du XVIII<sup>ème</sup> siècle*, 1963, Paris, Albin Michel, 1994.
- ELIAS Norbert, *Über den Prozeß der Zivilisation*, Basel, 1939. [ノルベルト・エリアス『文明化の過程』赤井慧爾・中村元保・吉田正勝・波田節夫・溝辺敬一・羽田洋・藤平浩之訳、法政大学出版局、1977-1978年、改装版2010年]
- FERGUSON Frances, « Legislating the Sublime » in *Studies in Eighteenth-Century British Art and Aesthetics*, Berkeley, Los Angeles, London, Ralph Cohen, pp. 128-147.
- , « The Sublime of Edmund Burke, or the Bathos of Experience » in *Glyph*, 8, Baltimore, 1981, p. 62-78.
- FOUCAULT Michel, *Les mots et les choses : une archéologie des sciences humaines*, « Bibliothèque des sciences humaines », Gallimard, 1966. [ミシェル・フーコー『言葉と物』渡辺一民、佐々木明訳、新潮社、1974年]
- FUMAROLI Marc, « Rhétorique, tragédie, philosophie : Sénèque et le sublime » in *Giornale Italiano di Filologia*, 1969, pp. 245-257.
- , *Héros et orateurs, rhétorique et dramaturgie cornéliennes*, Genève, Droz, 1990.



- GÉNÉTIOT Alain, « Boileau poète dans L'Art poétique » in *Papers on French seventeenth-century literature*, XXXI, 61, 2004, pp. 347-366.
- GILBY Emma, « Sous le signe du sublime : la rencontre de Boileau et Longin » in *Papers on French seventeenth-century literature*, XXXI, 61, 2004, pp. 417-425.
- , *Sublime Worlds: Early Modern French Literature*, London, Legenda, 2006.
- , « La théorie et la pratique du sublime chez Corneille » in *Pratiques de Corneille*, éd. Myriam Dufour-Maître, Publication des Université de Rouen et du Havre, 2012.
- GODINEAU Dominique, *Les femmes dans la France moderne - XVI<sup>e</sup>-XVIII<sup>e</sup> siècle*, Paris, Armand Colin, 2015.
- GRELL Chantal, *L'Histoire entre érudition et philosophie, étude sur la connaissance historique à l'âge des Lumières*, Paris, PUF, 1993.
- , *Le Dix-huitième siècle et l'Antiquité en France, 1680-1789, Studies on Voltaire and the eighteenth century*, (313), Oxford, The Voltaire Foundation, 1995.
- GRANDEROUTE Robert, « Goût et réflexion pédagogique au XVIII<sup>ème</sup> siècle » in *L'Encyclopédie, Diderot, l'esthétique, Mélanges en hommage à Jacques Chouillet 1915-1990*, Paris, PUF, 1991, pp. 289-295.
- HACHE Sophie, *Langue du ciel, Le Sublime en France au XVII<sup>e</sup> siècle*, Paris, Champion, 2000.
- HARTMANN Pierre, *Du Sublime (de Boileau à Schiller)*, Presses Universitaires de Strasbourg, 1997.
- HAZARD Paul, *La Crise de la conscience européenne, 1680-1715*, Paris, Fayard, 1960.
- HOWELL, Wilbur Samuel, *Eighteenth-century British logic and rhetoric*, 1971, Bristol, Thoemmes Press, 1999.
- , *Logic And Rhetoric In England 1500-1700*, 1961, Bristol, Thoemmes Press, 1999.
- JAUME Lucien, *L'individu effacé*, Paris, Fayard, 1997.
- , *Les origines philosophiques du libéralisme*, Flammarion, « Champs Essais », 2010.
- , *Qu'est-ce que l'esprit européen ?*, Flammarion, « Champs Essais », 2010.
- HUNT Lynn, *Politics, culture, and class in the French Revolution*, University of California Press, 1984. [リン・ハント 『フランス革命の政治文化』 松浦義弘訳、平凡社、1989年]
- , *The family romance of the French Revolution*, University of California Press, 1992. [『フランス革命と家族ロマンス』 西川長夫・平野千果子・天野知恵子訳、平凡社、1999年]
- *Inventing human rights : a history*, New York, W. W. Norton, 2007. [『人権を創造する』 松浦義弘訳、岩波書店、2011年]
- KERSLAKE Lawrence, « An Early Eighteenth-Century Theory of the Sublime : François Sylvain's *Traité du sublime* » in *Revue de l'Université Ottawa*, 1980, (50), p. 262-279.
- , *Essays on the sublime*, Bern, Peter Lang, 2000.

- LE GUERN Michel, « L'éthos dans la rhétorique française de l'âge classique » dans *Stratégies discursives*, Actes du Colloque du Centre de Recherches Linguistiques et Sémiologiques de Lyon, 20-22 mai 1977, Presses Universitaires de Lyon, 1978, pp. 281-287.
- , « La Question des styles dans les traités de rhétorique » in *Qu'est-ce que le style ?*, Paris, PUF, 1994.
- , « Le style dans les Rhétoriques de Cassin et de Vossius » in *Littératures classiques*, n° 28, 1996, pp. 61-68.
- LÉVY Maurice, *Le Roman « gothique » anglais 1764-1824*, Paris, Albin Michel, « Bibliothèque de l'Évolution de l'Humanité », 1995.
- MAUZI Robert, *L'Idée du bonheur dans la littérature et la pensée françaises au XVIII<sup>e</sup> siècle*, Paris, Albin Michel, « Bibliothèque de l'Évolution de l'Humanité », 1994.
- MERLIN-KAJMAN Hélène, « Civilité : une certaine modalité du vivre-ensemble » in *Civilization in French and Francophone Literature*, ed. by Buford Norman, James Day, "French Literature Series", Vol. XVIII, 2006, pp. 117-130.
- MAY Gita, « Diderot and Burke : A study in aesthetic affinity » in *Publications of the modern language association of America*, n° 5, December, 1960, pp. 527-539.
- MICHEL Alain, « Rhétorique, tragédie, philosophie : Sénèque et le sublime » in *Giornale italiano di filologia*, Naples, Armani, 1969, (21), pp. 245-259.
- , « Rhétorique et poétique : La théorie du Sublime de Platon aux modernes » in *Revue des études latines*, Les Belles Lettres, 1976, (54), pp. 278-307.
- , *La Parole de la Beauté. Rhétorique et esthétique dans la tradition occidentale*, Belles Lettres, 1982.
- MONK Samuel, *The Sublime, a Study of Critical Theories in XVIII-Century England*, Modern Language Association of America, 1935.
- MORNET Daniel, *Histoire de la clarté française : ses origines, son évolution, sa valeur*, Paris, Payot, 1929.
- MORTIER Roland, *Clartés et Ombres du siècle des Lumières, Étude sur le XVIII<sup>ème</sup> siècle*, Droz, 1969.
- , « Du "poétique local" au paysage pathétique ou l'évolution de la peinture de paysage, en France, après 1760 » dans *Le Paysage en Europe du XV<sup>ème</sup> au XVIII<sup>ème</sup> siècle, Actes du colloque organisé au musée du Louvre par le Service culturel du 25 au 27 janvier 1990*, Éditions de la Réunion des Musées nationaux, 1994.
- NICOLSON Marjorie Hope, *Mountain Gloom and Mountain Glory : The Development of the Aesthetics of the Infinite*, 1959, University of Washington Press, 1997. [M・H・ニコルソン『暗い山と栄光の山』小黒和子訳、国書刊行会、〈クラテール叢書 13〉、1994年]

- NIDERST Alain, « Hommage à Linda Timmermans » in *Papers on French seventeenth-century literature*, 46, 1997, pp. 13-14.
- POCOCK John Greville Agard, *Virtue, commerce, and history : essays on political thought and history, chiefly in the eighteenth century* [1985], Cambridge University Press, 1995, p. 50.  
[J. G. A. ポーコック 『徳・商業・歴史』 田中秀夫訳、みすず書房、1993年]
- RADICA Gabrielle, *L'Histoire de la raison. Anthropologie, morale et politique chez Rousseau*, Paris, Champion, « Les dix-huitièmes siècles », 2008.
- REBOUL Olivier, *Introduction à la rhétorique*, PUF, « Premier cycle », 1991.
- , *La Rhétorique*, PUF, « Que sais-je ? », 1984, 1993. [オリヴィエ・ルブール 『レトリック』 佐野泰雄訳、白水社、〈文庫クセジュ〉2000年]
- ROLLIN Sophie, « De la société de salon à la société de cour : l'ambivalence du processus de civilisation » in *Civilization in French and Francophone Literature*, éd by Buford Norman, James Day, "French Literature Series", Vol. XVIII, 2006, pp. 131-146.
- SAINT GIRONS Baldine, *Esthétiques du XVIII<sup>ème</sup> siècle, beaux-arts, architecture, art des jardins : le modèle français, Anthologie critique*, Paris, Philippe Sers Éditeur, 1990.
- , « Sublime (Philosophie du) » in *Encyclopaedia Universalis*, 1990.
- , « Avant-propos » de la *Recherche philosophique sur l'origine de nos idées du sublime et du beau*, 1757, 1990, 2<sup>ème</sup> éd. revue et augmentée, Paris, Vrin, 1998.
- , *Fiat lux, Une philosophie du sublime*, Paris, Quai Voltaire, 1993.
- , *Les Monstres du sublime, Victor Hugo le génie et la montagne*, Paris, Édition Paris-Méditerranée, 2005.
- SHER Richard B., *Church and University in the Scottish Enlightenment, The Moderate Literati of Edinburgh*, Princeton, Princeton University Press (Edinburgh, Edinburgh University Press), 1985.
- SPECTOR Céline, *Montesquieu : pouvoirs, richesses et sociétés*, Paris, PUF, « Fondements de la politique », 2004.
- , *Montesquieu : Liberté, droit et histoire*, Paris, Michalon, « Le bien commun » 2010.
- , *Au prisme de Rousseau. Usages politiques contemporains*, Oxford, Voltaire Foundation, 2011.
- , *Penser l'Europe au XVIII<sup>e</sup> siècle : Commerce, Civilisation, Empire*, A. Lilti et C. Spector dir., Oxford University Press Studies in the Enlightenment, 2014.
- , *Rousseau : Les paradoxes de l'autonomie démocratique*, Paris, Michalon, « Le bien commun », 2015.
- SMOLIAROVA Tatiana, « L'Ode sur la prise de Namur : entre ode et parodie » in *Papers on French seventeenth-century literature*, XXXI, 61, 2004, pp. 401-416.

- SYNIDERS Georges, *La Pédagogie en France aux XVII<sup>ème</sup> et XVIII<sup>ème</sup> siècles*, Paris, PUF, 1964.
- TAMADA Atsuko, « La laïcisation de la notion de sublime « rhétorique » au XVIII<sup>e</sup> siècle » in *Études de Langue et Littérature Françaises*, La Société Japonaise de Langue et Littérature Françaises, 2007, (90), pp. 51-65.
- , « L'amour de la terreur et l'esthétique « libertine » : deux motifs dégradant la notion de sublime au XVIII<sup>e</sup> siècle » in *Études de Langue et Littérature Françaises*, La Société Japonaise de Langue et Littérature Françaises, 2007, (91), pp. 3-19.
- , « La continuité des discontinus : le « sublime » dans la rhétorique et l'esthétique des Lumières » in *Études de Langue et Littérature Françaises*, La Société Japonaise de Langue et Littérature Françaises, 2008, (93), pp. 19-37.
- TIMMERMANS Linda, *L'accès des femmes à la culture*, Paris, Champion, « Champion Classiques », 1993.
- THOMAS Chantal, « Des femmes et de leur éducation ou Portrait de la femme naturelle » in *De l'éducation des femmes de Lacros [1783]*, Grenoble, Jérôme Millon, 1991, pp. 9-42.
- VIALA Alain, « Corneille, premier auteur moderne ? » in *Pratiques de Corneille*, éd. Myriam Dufour-Maître, Publication des Université de Rouen et du Havre, 2012.
- WAQUET Françoise, *Le Latin ou l'empire d'un signe*, Paris, Albin Michel, 1998.
- ZUBER Roger, « Le théâtre classique et l'honnête homme : histoire ou mythe » in *Littérature Classique*, « Mythe et Histoire dans le Théâtre Classique – Hommage à Christian Delmas », 46 (numéro supplément), 2002, pp.181-183.
- , *Le classicisme*, Paris, Frammarion, 1984, 1998.
- 安藤隆穂『フランス自由主義の成立公共圏の思想史』名古屋大学出版会、2007年。
- 植村邦彦『市民社会とは何か——基本概念の系譜』平凡社新書、2010年。
- 大島利治「崇高さという文学理念について——ボワローを中心に」『共同研究西欧における古代神話・文学の伝承と再創造』共立女子大学総合文化研究所神田分室、2000年、29-45頁。
- 梶谷二郎「Pierre Corneilleの演劇作品における崇高について」『ノートルダム清心女子大学紀要 外国語・外国文学編』39号、2004年、30-52頁。
- 桑島秀樹『崇高の美学』講談社選書メチエ、2008年。
- 小西嘉幸『テキストと表象』水声社、1992年。
- 高岡尚子『摩擦する「母」と「女」の物語——フランス近代小説にみる「女」と「男らしさ」のセクシュアリティ』晃洋書房、2014年。
- 森村敏己「商人貴族論の射程——貴族は有用な市民か？」『一橋社会科学』1巻、2009年、1-20頁。

——、「知られざる文人たちの奢侈批判 —— 1782年ブザンソン・アカデミー懸賞論文」『一橋社会科学』7巻、2015年、53-74頁。

玉田 敦子  
(中部大学人文学部准教授)

---

---

一橋大学社会科学古典資料センター *Study Series. No. 72*

発行所 東京都国立市中2-1  
一橋大学社会科学古典資料センター  
発行日 2016年3月31日  
印刷所 新宿区新小川町3-9  
(株)平河工業社

---

---

